
漂流者は守護者で保護者～ヤテンノオヤコ～

金貨の騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漂流者は守護者で保護者ゝヤテンノオヤコゝ

【Nコード】

N8489Y

【作者名】

金貨の騎士

【あらすじ】

なのはやフェイト達、そして自分の同類であるフィアと共にジュエルシード事件を解決した八神みらい。しかし、そんな彼らを今度は『闇の書』が騒動に巻き込む…。

『漂流者はハイブリッドな現役将校（無印編）』の続き（A's編）です。

とある世界の物語（前書き）

どうもこんにちは、金貨の騎士です。改めてよろしくお願ひします。
感想は指摘でも不満でもいいんで遠慮なくどうぞ。

とある世界の物語

昔々、あるところに一人の男の子がいました。彼は魔法が大好きでいつも魔法の練習をしていました。男の子はたくさん練習をしたのでとても魔法がうまくなり、天才とまで言われました。

ところが、それを羨ましがった友達は何を嫌い、大人たちは彼を化け物と呼び、家族には怖がられて捨てられてしまいました。男の子は一人ぼっちになってしまいました。

一人で魔法の練習をして、一人で遊び、一人で食事をし、一人で眠り、いつのまにか男の子は世界で一番不幸な者になってしまいました。

そんなある日、男の子は一冊の本を拾いました。その本は、拾った人の願いを叶えてくれる魔法の本でした。そして彼は願いました。

『寂しいのはもう嫌だ！！誰か僕と一緒に居て！！』

男の子の願いは叶いました。魔法の本に宿る女神様は、四人の家来を彼の家族として呼び出しました。男の子はとても喜びました。

それからというもの、新しい家族に囲まれた男の子は毎日が幸せでした。一緒に魔法の練習をして、一緒に遊び、一緒に食事をし、一緒に眠り、毎日が光輝いていました。

彼女達と暮らすうちに新しい友達がたくさんでき、好きな女の子もできました。気づいたら彼の周りにはたくさんの人達がいました。

でも男の子は女神様と家族のみんなが一番好きでした。

ところが、そんな日々も突如終わりを告げました。魔法の本の女神様と四人の家来は旅に出なくてはいけなくなりました。その旅に男の子は連れていきません。男の子は悲しくて泣き続けました。

『一人にしないで!!』

女神様は男の子を優しく諭します。

『あなたはもう一人じゃありません、あなたの周りにはたくさんの人たちが居るのだから…。だから、もう泣かないで。私たちに笑顔を見せてください…。幸せになってください…。』

願いを叶え続けてくれた女神様の初めてのお願いに、ついに男の子は泣くのを止め、笑顔で女神様達を見送りました。

それから時が経ち、世界で一番一人ぼっちだった男の子は、世界で一番多くの友達を持ち、世界で一番温かい家庭を手に入れました。

それでも彼は、女神様と家族達のことを忘れないために…“みんなに忘れられないように”、“彼女達と過ごした日々のことを本にしました”。

いつの日か、誰かが女神様たちに会った時に、こう伝えてほしくて…。

『ありがとう…僕は世界一の幸せ者になれたよ……。』

くアルテミア王国童話集・男の子と本の女神く

プロローグ（前書き）

さゝ頑張ろう

プロローグ

はやてside

〈海鳴市・ジュエルシード事件の2年前〉

時刻は午後8時。車椅子の少女が暗い夜道を一人で進んでいた。

彼女の名前は『八神はやて』。幼いときに両親を亡くし、その後は一人で暮らしている。今日は気晴らしに隣町まで電車で出かけたのだが、帰りの電車が途中で止まってしまったのだ。整備不良なのか人身事故なのかは定かでは無いが、そのせいで自宅付近に着いた時には、辺りはすっかり暗くなっていた。

「はあ…特におもしろいこともなかったし、今日は散々や…」

つつい溜息と共に愚痴が零れてしまう。別に隣町に何も無いわけではなかった。この辺では見かけない店や、公園だってあった。でも…。

「…一人で行ってもつまらへん……。」

学校に行っていないので友達はロクにおらず、通院先の石田先生とは仲はいいが忙しいだろうし、遺産を管理してくれてるおじさんも同様である。

「……言っても仕方あらへんか…、気づいたら家が目の前やし…。」

一人モンモンと考えながら帰り続けてたら自宅が見えてきた。一人暮らしの自分にとっては広すぎて寂しく感じる自分の家が…。

ところが、玄関前に辿り着いたら心臓が止まりかけた。

…黒装束の男が一人、玄関に立っていた。

「だ、誰…？」

当然ながら何者かを問うはやて。しかし男の口から出た言葉は、はやての『困惑』を『恐怖』へと変えた。

「『闇の書』に選ばれし者よ…我らの計画のためにも、お前には死んでもらう…！…！」

「…え。」

言うや否や、男は長い棒のような物を取り出し、はやてに向ける。そして、その先端に光が灯り始めた…自分の命を奪う死神の光が…。

だが、はやてはそれを見て恐怖しつつも、浮かべた表情は『苦笑』だった…。

（神様…私って、何か嫌われることでもしたん……？）

- - - 私は一人ぼっち…。

- - - 友達もいない…。

- - - 家族もいない…。

- - - さらに命まで奪うと言っんか…。

（…………あの世で会ったら絶対文句言ったる…。）

そんなはやての心情も知らず、男ははやてを不気味な物を見るような目で睨む。

「殺されそうな目に遭ってるにも関わらず笑うとは…やはり、貴様は死ぬべきだ。消えろ!!」

(こんな…こんなあんまりや…!!)

その言葉にはやては、自分の死を覚悟して目を瞑る。だが、何故か男が驚愕の声を上げる。

「ッ!? 何だ!？」

男が急に焦りだしたことを不思議に思い、はやては目を開ける。すると、男が驚愕の表情ではやてを見ていた…否、はやての“背後”を見ていた。つられるように背後を見ると…

「…ここはどこだ？」

グレーの髪に緑色の目、羽根突き帽子を被り、全体的に茶色い貴公

子のようなスーツを着た男が立つおり、周囲をキョロキョロと見回していた。さらに、彼の背後には光輝く魔方陣のような物が漂っている。

黒装束の男がはやてに向けていた棒を、その男に向けて問う。

「何者だ貴様！！次元漂流者か！？」

「ん？次元漂流者？…知らぬ。逆に訊くが、『アルテミア王国』を知っているか？」

「どこの世界だそれは！？」

「そうか、知らないか…。お前はどんなんだ？」

そう言つてはやてに尋ねる。さつきからありえない状況が続いているにも関わらず、不思議と落ち着いてきた。なので男の質問に答える。

「…知らへん…いや、知りません…」。

「ふむ、わかったありがとう…。ところで、この状況はアレか？俺はどうすればいいんだ？」

そう言つて黒装束に視線をやる。すると黒装束は口を開いた。

「貴様は俺の邪魔をせず、黙つて消え失せればいい。」

「…なんの“邪魔を”だ？」

「無論、この小娘を殺すところをだ…。」

その言葉を聞いた途端、彼は眉を顰めた。そして、はやてに声を掛ける。

「…おい、お前は殺される心当たりはあるのか？」

「さっぱりわからへん…。なあ、あんたもせめて理由を教えてくださいへんか？」

「どうなんだ、黒いの？」

「貴様らに教える義理は無い。」

二人の問いかけに即答した黒装束の男。それに対し、彼は額に青筋を浮かべた。

「そうか…ならば、俺はお前の邪魔をしよう。」

「…え？」

「何だと…？」

その言葉に困惑する二人。そんな二人を余所に、彼は指と首をペキペキ鳴らし始める。

「当然であろう。俺からしたらお前は、か弱い少女を襲う不審者か変態にしか見えん。」

「漂流者風情が、とっとと消えうせればよいものを…後悔するかい…！」

黒装束の杖…デバイスの先端から光の矢が放たれた。しかし、彼はそれを…

「ふんつ。」

- - 魔力を纏わせた片腕で弾いた。

「何！？――（ガシツ！！）ぬッ！？」

「貴様の事情は知らん。だが俺に敵意を持たせ、俺に殺意を向けた
…その時点で貴様は俺の敵だ。ならば…。」

彼は驚愕する黒装束に掴み掛かり、そのまま…

「目の前の敵は全て我が屠る！！せえい！！」

- - ブオン！！

「うわあああああああああああああ！？」

空に向かって投げ飛ばした。だが、彼は止まらない。続けて出現させた魔法陣に手を突っ込み、そこから銃剣を取り出した。そして…。

「それが我『ラインベルト』なり！！【天河瀑布】！！」

・・・ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

青白い光の柱が夜空へと伸びていった。はやてはその光景を呆然と眺めていた。やがて、自分を助けてくれた彼は舌打ちをしながらこつちを向いた。

「逃げられたか…。おい、怪我は無いか？」

「…あ、大丈夫です。ありがとうございます。…あのぉ、おじさんの名前は？」

・・・グサリッ！！

そんな音が聴こえた気がした。何故か、名前を尋ねられた彼はorz状態になっている。

「えっと…、どうかしたん？」

「…名前は『ミランダル・ラインベルト』……まだ、24歳だ…。」

「ええ！？全然ッ見えへんッ！！30ぐらいあるかと思たわ…。」

「気にしてるんだからそれ以上言っな…。お前の名は…？」

「自分、『八神はやて』言います。改めて、ほんまにありがとうございます。」

とりあえず危険が無くなり、一安心する二人。不意にはやてが口を開く。

「ところでミランダルさん、さっき次元漂流者って言われてたやん？それってなんや？」

「俺も分からんが…多分、異世界から跳んできた遭難者のことじゃないのか？」

「ミランダルさんって迷子なん？」

「…別の言い方は無いのか？だいたい、さっき通ってきた魔法陣をくぐれば帰れ……。」

「…彼が出現した時に背後で浮いていた魔法陣は、とつくに消滅していた。」

「…迷子確定やね。」

「…そうだな。」

ミランダルが凹んだその時、はやては何かを思いついたかのような表情を見せ、ミランダルに話しかける。

「ミランダルさん、しばらく私の家に来いへんか？」

「…いいのか？」

「ええよ。……どうせ、私しかおらんし……。」

その言葉にミランダルははやてのことを色々察した。なので、あえて厚意に甘えることにした。

「それじゃあ、少しの間世話になる。よろしくな、はやて。」

「こちらこそよろしく、ミランダルさん。」

・・・こうして『銀河の守護霊』と呼ばれた男は、そう遠くない未来に『夜天の主』と呼ばれる少女と出会い、騒がしいくらい賑やかな日々を送り始めるのであった。

第一話 非日常な日常（前書き）

ヴォルケンズの登場までもうしばらくお待ちください…。

第一話 非日常な日常

みらい side

〈現在（冬）・海鳴市、八神家付近〉

『ミランダ・ラインベルト』改め『八神みらい』は、道を歩きながらはやてと出会った時を思い出していた。あの時はちよつと居候したら去るつもりだったのだが、気づいたらもう3年近くも一緒に暮らしており、お互いに家族として認め合っていた。

「みらいさん、どうしたんですか？」

「ん？ちよつと昔のことを思い出してな…。」

「ふん。それにしても、楽しみだな。はやてちゃんの家に行くの。」

彼の隣には、栗色の毛をしたはやてと同じ年齢の少女、『高町なのは』がいた。ジュエルシード事件に決着がついたあとも当事者達は交流が続いていた。基本的に暇な八神家やフィアがちよくちよく『翠屋』に遊びに行っていたのだが、今日はなのはが八神家に行くことにしたのである。はやては家でなのはと彼女を迎えに行つたみ

らいを待っている。

そして、ついに八神家に着いた。

「おじゃまします。」

「いらつしやうい。」

玄関に上がると、リビングのはやて前と後ろ（背後のみらい）から返事が返ってきた。なのはは、そのままはやてが居るであろうリビングへと向かった。みらいも続いて靴を脱いで、それを揃えるために視線を下に向けた。その時…。

「ひゃあああああああああああああああ！？」

――ズドンッ！

「にゃあああああああああああああああああああ
あああ！！？？」

はやてとなのはの悲鳴、さらに何かが突き刺さる音が八神家に響いた。何事かと思い顔を上げると、目に入ってきたのは扉の前で腰を抜かしたなのはと…。

――リビングへの扉をぶち破り、顔を突き出すカジキマグロだった…。

はやてside

みらいに拳骨を落とされたはやては今、頭を抑えてゴロゴロしていた。

「痛い――そんなに怒らんでもええやんか。」

「馬鹿野郎！！『家でカジキに刺される』なんてシニール過ぎて笑えんわ！！」

「み、みらいさん…別に怒ってないからもついいですよ……？」

二人のことを待つてる間、暇になったはやては最近すっかりハマッタ釣りをしながら待つことにしたのだ。みらい特製の『どこでもフイッシング魔法陣（はやて命名）』を発動させ、魔法で強化した釣り道具を使い、暇つぶしを始めたはやて。

しばらくして、なのは達が家に来たと同時に竿に魚がヒットした。
みらいとなのはが来たことだし、さっさと釣り上げて終わらせよう
と思い、釣竿をおもいきり振り上げた。

みらいがその釣竿を『鯨が釣れるほど強化してあることを』忘れて
…。

「それで…？あれほど勢いよく釣竿を振り上げるなど言ったのにソ
レをやらかし、異常なくらい勢いをつけてカジキを釣り上げ、その
まま扉にズドンか？」

そう言って扉から顔だけ突き出し、ダランとしているカジキに目を
やる。

「…うん。」

「全く…。次同じことやったらデコピン（恐怖の制裁）だからな？」

「ひいっ！？それだけは勘弁やー！ー！！！」

（拳骨より怖いのか？）

はやての異常なビビリ具合に不思議に思うのは。しかし、彼女は知らない。みらいのデコピン（恐怖の制裁）は魔力を纏わせた手でやってくることを…。

「あれはマジで首が飛ぶかと思たわ…。」

「一体どんなデコピンなの！？ていうか、はやてちゃんその時何したの？」

「エイプリルフルでみらいさんの私物を全部質屋に入れたって嘘ついた。」

「…自業自得なの。」

次元漂流者のみらいがエイプリルフルを知ってるわけ無いのに…。不意になのはの視界にあるものが目に入った。

「あれ？その本はなんなの？」

そう言ってリビングの窓際に佇む本を指差す。その本は全体的に黒く、独特な装飾がされていたが、一番気になったのはその本が鎖で縛られていたことである。

「あ、またこんな所に来て…。」

「やれやれ、この前なんてトイレにいたぞ？」

「…ん？」

二人の反応になのは違和感を感じた。この本が二人の物なのは分るのだが…。

「ねえ、はやてちゃん…二人の言い方がすごい気になるんだけど…。」

「ん？なんか変やった？」

「うん、なんか『この本がまた勝手に動いた』みたいに聴こえたの…。」

「それであつてんよ？」

「……………ふえ？」

-
-
-
今、なんと仰った？

「だからこの本、家の中なら神出鬼没なんよ…。戻しても戻してもどっかに行くんや…。」

「ふえ ええええええ！？オバケええええええええええええ！」

「……自分だって魔法少女で魔王だろうが……」

取り乱すなのはボソリと突っ込むみらい。だが、とりあえず説明してやることにした。

「これは俺の持ち物でな、俺の一族に代々伝わる家宝……らしい。」

「らしいって。」

「ずっとこの鎖が外れなくてこれがなんの本なのかすら判つて無いんだよ……。ところがだ、はやての家に居候し始めた時にな、はやての部屋にもこれにそっくりな本が置いてあつたんだよ。」

「それで？」

「折角だから二冊とも本棚に並べて置いたんだが…そこから例の怪奇現象が始まった。」

それを聞いただけでなのは顔を青くした。ある時はリビング、ある時は玄関にキッチン、さらにはトイレにまで出現する謎の本に最初こそビビッタものの、それ以上のことは無かった。

「ぶつちやけ詳しいことは私らにも分からなかったけど、呪ってくる訳でもないから無害やし、ほっとしてるんや。なにより流石にもう慣れたわ…。」

「そ、そうなの…。」

とりあえず謎の本のことはこれで終わりになった。

「この話はもういいだろう。なのは、フェイトからのビデオレターは？」

「あ、ちゃんと持ってきてますよ。」

「ほんまか！？フェイトちゃん私のメッセージ見てくれたかな？」

何度か『翠屋』に行った時に、一緒にビデオレターを見せてもらい、なのはが返事を送るついではやても自分のメッセージも便乗させてもらったのである。

「私もまだ見てないんだよね。……そういえば、フィーアさん来れなくて残念だったね…。」

「いや、あいつはむしろ結果オーライだろ。運がよければフェイト達に直接会えるだろうし。」

この場にいないもう一人を思い出す二人。彼は今、とある用事で海鳴市どころか地球にすらない。

「フィーア兄、今頃どうしてるんやろか……ボソッ」また一緒にみらいさんからかって遊びたい…。」

「今頃、武装隊の半分くらいは花畑と川を見る羽目になってんじゃないか？」

そう言ってみらいは、ジュエルシード事件を経て戦友となった彼のことを思い浮かべるのだった。

クロノ side

〈とある管理外・世界〉

そこは碌に生物がおらず、瓦礫の山が広がり続ける世界だった。かつては高度な文明を持っていたようだが何かの原因で滅亡し、世界全体がただの廃墟と化したのである。

そんな世界でクロノは瓦礫に身を潜め、今の自分の状況を呪った。

「……なんでこんなことに…」

今思えば、心の中で『所詮質量兵器』などと思っていたのかも知れない…。今はそれが恐ろしい勘違いだと自覚していたが…。気づけば味方はほぼ全滅、残ってるのは自分だけだった。

「とにかく、ここから離れないと…」

《目標を発見しました。クロノさんです。》

「流石と言うべきか……。やっぱり最後まで残ったのはお前か……。」

「ッ!？」

突如上空から声が響いた。クロノが慌てて上を見上げると、そこには黒い軍服を身に纏い、背中に黒い4枚の翼、赤みを帯びた茶髪に青い瞳、さらに肩には金色に近い毛並みの猫を乗せた男が居た。

やがて男は口を開く。

「訓練時間終了。クロノ、お前はクリアだ。」

みらいと同じく次元漂流者であり、臨時教導官の『フィア・レイガード』はそう言った。

第一話 非日常な日常（後書き）

次回の更新は月曜日くらいになりそうです。

第二話 鉄と火の脅威（前書き）

あれ？サイトの画面がおかしい…俺だけ？今だけ？

第二話 鉄と火の脅威

クロノ side

数時間前、アースラ・執務官室

「生存訓練…？」

「おう。ぶつちゃけ、お前らの質量兵器に対する認識が甘すぎる…。」

「

クロノの執務室に来て開口一番にフィアはそう言った。現在彼は、リンディとの取引の結果『臨時教導官』をやらされている。素性や能力の関係上ミッドチルダや管理世界には立ち入るのは不可能だが、管理外世界や無人世界なら可能とということで引き受けることになった。

管理局には素性（連邦）を明かしたくないので、『現地協力者』で通している。フィアと彼の祖国『ベルフィア連邦』のことは、ジュエルシード事件に関わったなのは達とアースラのメンバーしか知らない。

「ところで、その肩の猫は？」

「ん？…ああ、こいつは『アリス』だ。この前拾った。」

今、フィーアは肩に猫を乗っけている。その猫は尻尾が二つあり、金色のような毛並みを持っていた。

「それよりも…今後の訓練の参考までにアンケート的なモノをやったんだが…。見てみる。」

苦い顔をしながら、そのアンケート用紙をクロノに見せる。対象はアースラの武装隊である。

「……………。これは…本当なの…か？」

「…一応、書いた本人達に訊いてみたが…マジだ。」

その結果を見たクロノは啞然とした。アンケートに書いてある内容は以下の通りである。

…日頃の訓練内容について。

- - - 今まで経験した戦闘状況について。

- - - 各自の得意分野。

この3つの内容だけの結果ならば、全体的に別段おかしいことは何も無かった。しかし、二つ目の内容の結果にフィードバックはある違和感を感じ、内容をひとつ追加して改めてアンケートを取ったのだが…。

「『今まで遭遇した質量兵器。』を訊いてみたんだが…。改めて問うが、お前ら管理局の目標のひとつは『質量兵器の根絶』だよな？」

「…その通りだ。」

「なのに武装隊の半分近くが『銃と刃物しか“知らない”』ってのはどういうことだ！？“遭遇してない”じゃなくて“知らない”ってのは！？」

そうなのだ…彼らの半数近くが“魔法関係の戦闘”しか経験しておらず、“質量兵器との戦闘”を経験した者がいないに等しかったのだ…。管理局全体が魔法主義なのは解ってるが、先日のように地球のような世界にだって行く時があるのだ。質量兵器と戦闘する可能性が無いわけ無い。

「つーわけで、リンディ提督にも許可貰ったからちよいと痛い目に遭ってもらう。なに、安心しろ。死なない程度でやってやる。」

「…分かった。彼らにもいい機会だ。是非やってくれ。」

「アホ。『リンディ提督に許可貰った』って言っただろ？今更、お前の許可を取りに来たわけねえだろ。お前も参加するんだよ。」

「…え？」

フイア side

「2時間前・とある無人世界」

「諸君、俺が臨時教導官のフイア・レイガードだ。よろしく頼む。なるべく返事は『了解』で返せ。」

「……了解!!」「……」

訓練場所選ばれた無人世界で、武装隊メンバーの返事が響く。肩に猫アリスを乗つけたフイアの隣には、クロノが顔を青くしながら立つ

ていた。

（…フィアは“アレ”を向けてくるんだらうか？確か魔法弾も鉛弾も撃てると言ってたが……。）

“アレ”とは、フィアが『時の庭園』で使用した【炎翼砲門】のことである。合計十五門のガトリング砲による一斉射を目の前で見たクロノは、自分があの時の傀儡兵のようにバラバラにされるところを想像してしまった。

……だが、待っていた現実はそれどころでは無かった…。

「と、言うわけで…これから諸君らには質量兵器との戦闘訓練を行うってもらう。質問は？」

いつのまにか大雑把な説明が終わったようである。若い局員が手を挙げ、フィアに質問する。

「意味あるんですか？それ…。」

…質問どころか、真っ向から否定してきた。その局員に対し、フィ

ーアとクロノは溜息をつく。渋々ながらフィーアが口を開く。

「お前、名前は？」

「『ジム・ヘリオン』一等空士です。」

「そうか、ヘリオン空士か…。そこまで言うなら、お前には“特別な内容”を追加してやる。」

「…？」

意味が解らず、ヘリオン空士は首をかしげる。それを無視するようにフィーアは話を進めた。

「ま、『百聞は一見にしかず』。経験すれば嫌でも解るだろうさ…。ルールは至って簡単！！今から二時間、俺の攻撃から生き延びろ！！生き延びるためなら何をしても構わん！！魔法を使うもよし！！俺を攻撃するもよし！！とにかく生き残れ！！以上！！」

《訓練開始まで、残り1分前。》

リリアによるその言葉と同時に、アースラ武装隊のほとんどがフィ

ーアから逃げた。一部の武等派だけがフィーアの目の前に立ったままだが、どうやら開始と同時にフィーアを攻撃するつもりのようなのだ。

《残り30秒。》

「ほう、ヤル気満々か…。」

フィーアを睨む局員達。どうやら彼らはフィーアのことを気に食わないらしい。

「何をしてもいいんだろう?。」

「次元漂流者なんかに教えて貰うほど、俺らはひ弱じゃねえんだよ。」

その言葉にフィーアが困ったような表情を見せた。

《残り10秒。》

「…参ったな、これじゃあ訓練にならない……。」「

『訓練開始。同時に『ザク陸士』、『リーオー三尉』脱落。追加訓練決定だよー!』

「ちょっと待てエイミィ…追加訓練ってのは何だ？僕は聞いてないんだが……。」

『開始と同時に失格になっちゃった人達は訓練にならないから、後で改めてやり直したって。クロノ君や他のみんなも、あっさり失格になったら同様だってフィーア君が…。』

「なん…だと……。」

呆然とするクロノ。彼は直前にしたフィーアとの会話を思い出していた。

「…ちなみに、厳しすぎて訓練にならなかつたらどうするんだ？」

「…俺が“一人ずつ”、“丁寧に攻撃しながら”指導してやる。」

（冗談じゃない！！それは死ぬっ！！）

『善は急げ』とばかりにクロノはそこから急速に離れた。彼に連れて数人の局員達もその場から離れた。それとほぼ同時に…。

……ドゴオオオオオオオン！！

再び響く爆音。振り向くと、さっきまで彼らが居た場所が派手に吹き飛ばされていた。そんな中、局員の一人が空に指先を向けて声を上げる。

「おい！！あれは何だ！？」

その先には、煙を引きながらこちらに向かってくる複数の何かだった。クロノと一部の局員はそれが何か気づく。

「ッ！？馬鹿、あれは迫撃砲だ！！撃ち落せ！！」

「ええ！？あれも質量兵器！？」

その言葉と同時に放たれる複数の魔法弾。迫撃砲の弾は空中で迎撃され、ほとんどが爆散した。撃ちもらしたモノは見当違いの方へと

落ちていったようで、爆発音が響いた。

攻撃を防ぎきり、彼らは安堵する。

「…焦っちまったが、狙いが雑だったな。」

「まだこっちの場所が判って無いんじゃないのか？」

「……“判って無かった”の間違いじゃ…。」

「「「え？」」」

――3人目の言ったことは正しかった。嫌な予感がし、再び上を見上げると目に飛び込んで来たのは、彼らの位置を割り出したフィアアの集中砲撃による砲弾で真っ黒な空だった。

ヘリオン side

完全にこの訓練を舐めきっていたヘリオンは今、一人で瓦礫の廃墟

を走っていた。

（いったい何なんだ！？）

訓練開始からわずか30分たらずで、武装隊の3分の1が脱落となつてしまった。その現状が信じられず、ヘリオンは半ばヤケクソになつてきた。

「畜生！！質量兵器つて魔法より劣るんじゃないのかよ！！」

ヘリオンにそう吹き込んだ彼の先輩は、開始早々に脱落している。

「魔法に引けを取らないどころか加減知らずの分、性質悪いじゃないか！！」

「よく解つてんじゃないか。だが、それと戦うのがお前ら『時空管理局』じゃ無いのかよ。」

「ッ！？」

声がしたほうを見ると、涼しげな表情を見せるフィアが立っていた。その姿に、ヘリオンは嫌な汗を流す。直接は見ていないが、フ

イーアが質量兵器を用いて自分達を攻撃しているのは理解している。
故に、どのように攻撃してくるのか判らずヘリオンは恐怖する。

「まったく…機会が無かったとは言え、自分達が敵と認識してるものくらいちゃんと理解しておけ。」

《フィーア。彼もアンケートに『銃と刃物しか知らない』と書いた一人です。》

「…マジか。」

そうなのだ、ヘリオンも質量兵器をほとんど理解してない者達の人だったのである。ここまで生き残れたのは途中までクロノについできたからである。もっとも、途中で見失ってしまったが…。

「おい、ヘリオン空士。」

「…はい、なんでしょう?」

「俺の言った事は覚えてるか?」

「…自分だけ“特別な内容”を追加？」

そう言った途端、フィーアがニヤリとした。そして…

…ドガッシャアアアン！！

轟音と共に、何かが瓦礫を蹴散らしながらフィーアの背後に現れた。それは四角形が二段重なり、二段目には筒状のモノが正面に突き出しており、左右にキヤタピラを装備していた。早い話…。

…戦車である。

「第97管理外世界地球、日本の軍隊（自衛隊）の主力戦車、『90式』だ。」

「…、これも質量兵器！？」

90式の巨体に圧倒され、ヘリオンは後づさる。彼にとって戦車は、怪獣のようにも見えたらしい。若干涙目のヘリオンにフィーアは容赦無く宣告する。

「撃て。」

《発射！！》

――フィアとリリアの声、そして戦車の咆哮を最後にヘリオンは意識を手放した。

フィア side

〈訓練終了後（現在）〉

フィアはその後も【黒羽】を用いて質量兵器を大量生産しながら
局員達を恐怖のどん底に叩き落した。あるものは地雷に爆破され、
あるものは迫撃砲で蹴散らされ、あるものは戦車砲で蹴散らされた。
武装ヘリも使ってやろうかと思っただが、その頃にはクロノしか残っ
てなかったから結局止めた。

「んで、終わってみて感想は？クロノ。」

「…生きてるって素晴らしい。」

後半、クロノはとにかく回避することと逃避することに集中したようである。しかし、残り30分前にして生き残ったのが自分だけになり、フィアの攻撃が全て自分に集中した時は…

「瓦礫の世界で“綺麗な花畑と川”が見えたよ…。」

「…すまん、やりすぎた……。」

念のために断っておくが、フィアの魔道科学を用いて即席で造った非殺傷機能を使用したので、死者は一切出てないのであしからず。脱落者は全員アースラへ強制転移されている。今、アースラの医務室は全身打撲の武装隊メンバーで一杯だろう…。

「それにしても…君は戦車まで造れるのか……。」

「流石に執務官なら知ってたか、戦車。」

陸の質量兵器の王者、戦車。執務官ともなると、遭遇しなくてもその存在くらいは知っていたようである。

「今度の訓練内容に『戦車とタイマン』追加しとくか？」

「できれば遠慮したいが…頼む、やってくれ。魔法だろうが質量兵器だろうが、戦いの訓練に変わりはない。」

「了解。んじゃ、ちょっと休憩挿んだら訓練再開な。」

「了解した。」

その言葉と同時に、休息のためにアースラへと帰還するクロノ。転送ポートに入る直前、心なしか足をふらつかせながらガッツポーズを決めてた気がするが、見なかったことにした…。

「さてと…俺らも一回帰るか…。」

（ねえ、フイーア。）

誰も居ないはずのこの場所で頭に響く、自分のものでもリリアのものでもない声。しかし、彼は特に驚きもしないで返事をする。

「ん？どうかしたか？」

（なんでいつもは戦車とか造らないの？）

「無駄に高性能な動く砲台（戦車）を一台造るより、魔法で浮かせる大砲を三台作ったほうが安上がりなんだよ…。今回の訓練は、質量兵器を使う世界の常識に合わせてみただけだ。」

「魔法で空飛ぶ大砲なんて、自分の祖国ベルフィアくらいだろうし…。」

（ふん、そうなんだ…。）

「…なあ、いい加減フェイトたちに教えてもいいんじゃないか？」

（…まだ無理よ。心の準備というかなんというか…とにかく無理…。）

「…分かったよ。まだ秘密にしとくさ。でも、期待すんなよ？アリスも判ってると思うけど、俺の隠し事はすぐばれる…。」

（承知の上よ。それと、誰も居ないときは本名でいいわよ。）

「はいよ、『アリシア』。」

・ ・ ・ そう言って、フィアは自分の肩に乗った猫に… 『アリシア・
テストロツサ』に返事をした。

第三話 起動（前書き）

ついにあの四人が…

第三話 起動

みらい side

〔 12月24日・pm18:00・八神家 〕

「そうか…、こっちは当分帰れそうにないか…。」

『 ああ、ここぞとばかりにコキ使われてる…。年越しもアースラで過ごすかも…。 』

現在みらいは、はやてとなのは、それとなのはが呼んだアリサとすずか達と共にクリスマスパーティーを楽しんでいる。女子達の会話が盛り上がってきたその合間に、ベランダで一人くつろぎながら彼はフィーアと思念通信で談笑していた。

『 そつえばリーゼ姉妹に会ったぞ? 』

「元気にしてたか? 最近、二人とも仕事が忙しくて中々来ないんだ…。」

『その内『またちよっかい出しに行つてやる』ってよ。愛されてんな（笑）』

「……『また、はやての世話を頼んでやる（揉まれてしまえ）』と伝えとけ。」

特に『ロッテ』の方には散々悪戯された記憶がある……。同時に、はやてのセクハラを『アリア』以上に受けてたが…。

『はっはっはっ、了解。伝えとくさ。んじゃ、はやてとなのはにもよろしく。』

「おう。」

そこで通信を終わらす二人。みらいは誰もいないベランダから、はやて達のいるリビングへと戻っていった。

「アースラ艦内・フィア専用室」

アースラの空き部屋を改造して完成したフィア専用室。そこに“彼ら”はいた。

「あゝあゝ楽しそうで羨ましい限りだよ……。」

《こんな美女二人と一緒に過ごしたい何を言いますか。》

「……美女って……。」

《……聞かなかったことにしてください。自分で言っただけで恥ずかしくなりました……。》

お互いドンヨリとした空気を漂わせていた。異世界出身故に、クリスマスなんてイベントは知らなかったのだが、普通に楽しそうだったのでみらい達が羨ましかった。

そんな二人に声が掛けられる。

「まったく……。だからって、そんな雰囲気出さなくてもいいじゃない……。」

「とは言ってもなあ…。って！！勝手に人型になるな！！誰か来たらどうすんだ！！」

「大丈夫よ、近くに人の気配は無いわ。」

顔を上げるとそこには、綺麗な金髪を伸ばし、赤い瞳を持った少女がいた。服装は黒がベースのゴスロリ風のドレスを着ていた。その少女の姿は、フィーア達によく知る少女と瓜二つである。

「それにしても、改めてフェイトとそっくりだな…。いや、逆か…フェイトがアリシアにそっくりなのか…。」

「当然でしょ。フェイトは私の分身として生まれたけど、それ以前に大切な妹なんだから。」

「大切な兄弟が必ずしもそっくりになるとは限らねえぞ。」

「それは同じ“死に損ない”としての経験談？」

「…そう、彼女はフィーアの猫『アリス』こと『アリシア・テストタロツサ』である。」

例の事故で死んだ彼女は、プレシアのことが心配で『幽霊』と化してしまったのだ…。案の定、心配した通りにプレシアは廃人寸前になってしまい、尚更彼女のことがか心配になって成仏できなくなり、ずっとプレシアを見守り続けていたのだ。

ところが、プレシアが『プロジェクト・F・A・T・E』に手を出し始めた時に変化は起きた。当初アリシアは、プレシアが“自分の代わりとなる娘”を産み出そうとしているのかと思っていた…。かつて生前に交わした約束を母が守ってくれたと……。だが、現実とは違った。プレシアが求めたのは“アリシア自身だった”。それだけでも衝撃的だったにも関わらず、その後も悲しみは続いた。

生まれ方はどうあれ、アリシアはフェイトを妹として見ていた。何故なら、あの約束がある限り、自分が死ななくても彼女は生まれたかもしれないからだ。だから自分にとっては大切な妹であった。にもかかわらず、その大切な妹は、大切な母親に傷つけられていったのだ…。

――全ては自分が死んだせい…。

いつしかそんな考えが頭を占め、彼女は深い悲しみに苛まれていった…。やがて、限界を突破した負の感情により、『悪霊化』するはずだったのだが…。彼女は深い眠りについただけであった。彼女曰く、“温かい何か”に包まれた感覚だったそうだが…。

「ところで…、その“猫耳”と“尻尾”は隠せないのか？」

「無理よ。この耳と尻尾、あと世話好きの部分は『リニス』の名残なのよ…。」

書き忘れたが、今の彼女には猫耳と二つの尻尾が付いたままである。そして、今でお解かりになったと思うが、アリシアの悪霊化を防いだのは同じくプレシアのことが心配で幽霊化したフェイトの教育係りであり、プレシアの使い魔の『リニス』である。彼女はアリシアの魂と自身の魂を融合させて彼女を助けたのだ。意識を完全にアリシアに譲ったため、今となってはアリシアを助けた理由も含めて、彼女の真意は判らず終いである。

その後、『ジュエルシード事件』による『時の庭園』での戦闘により、おかしい空間が出来た。まず、『時の庭園』自体が“次元の狭間”に存在し、“ジュエルシードの暴走した魔力”、“時の庭園の動力炉”、“虚数空間”、“試作型AMF”、“異世界の超魔法”、“白い魔王とその仲間達の魔法”…今思えば、『混ぜるな危険!!』要素のオンパレードであった…そんな空間に居たせいか、眠っていたアリシアの魂に異変が発生し、気づいたらただの『幽霊』ではなくなり、そして…。

「俺も“普通に”亡霊化したら妖怪になったのかな…？」

「知らないわよ。」

《て言うか何を持って“普通”とするんですか？》

- - - 彼女は幽霊から妖怪になっていた。『猫叉』になったのはリニスが“山猫”だったからなのではと推測されている…。

「そんなにいいもんじゃ無いわよ？常に自分がここに居るのか居ないのかハッキリした感覚なくてフワフワしてるし…。大体、母さんとフェイトに『私、妖怪になったの』なんていきなり言えないし…。」

「あの二人とアルフは平気だと思っただが…。最初はビックリするだろうけど…。」

いきなりこんな形で甦ってきても受け入れて貰えるか不安なので誰にも打ち明けておらず、アリシアの事は未だにフィーアとリリアしか知らない。

「いいの！…とにかく今はまだ黙っとくの！…。」

「はいはい…。とにかく、そろそろ飯食いに行かないか？」

「え…私が作ろうと思ったのに……。」

「今度でいいよ。ほら、乗っかれ。」

『にゃ。』

そして、猫化したアリシアを肩に乗っけながらフィーアは部屋を後にした。途中、遭遇したエイミイがアリシアを思いつ切り抱きしめて引っ掻かれたのは割愛する。

はやてside

～pm23:57・八神家～

「あゝ楽しかった。来年もなのはちゃん達、呼ぶべきやな…。」

自分の寝室で眠りにつこうとしながら、今日の楽しい時間を思い出していたはやて。なのは達は、アリサを迎え来たリムジンに便乗させてもらいながら帰っていった。

みらいはリビングの片付が中々終わらず、悪戦苦闘している。

「…ただ、楽しすぎたせいで全然眠くならへん……。」

もう日にちが変わるというのに全く眠気がこないのである。いくら休日続きと言っても、寝不足はお肌の天敵である。

「そうゆう時はみらいさんに添い寝してもらうに限るわ…。」

はやては眠れない時、よくみらいに添い寝してもらっていた。みらいも別段断る理由も無く、すんなりとお願いを聞いてくれる。添い寝＋子守唄、時々朗読による効果は抜群で、絶大な安心感と共に眠りにつけるのである。

「早く戻って来いへんかな…あ、りや、25日になってもうた……。」

ふと時計を見たら丁度一日が終わったところだった。だが、それ以上気にすることも無くゴロリと寝返りをつつた。ところが…。

『起動。』

「え…？」

声のした方を振り向くとそこには…よく瞬間移動するみらいの本ではなく、今までピクリとも動かなかった“自分の本が怪しく光ながら宙に浮いていた”。思わず思考がフリーズするはやて。しかし、そんな彼女に構わず自体は進行する。

――カツ！！

「おわっ！？」

突如光が強く輝き、はやての寝室が光で満たされた。やがて、光が収まるとそこには、四人の人影が存在していた。そしてそのうちの一人、ピンク色の髪をしたポニーテールの女性が口を開いた。

「『闇の書』の起動、確認しました。」

続けてやや短めの金髪の女性が言葉を紡ぐ。

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士でございます。」

そして、白い髪で獣の耳と尻尾を付けた筋肉質の男と、赤い髪を三

つ編みにした少女が言葉が続けた。

「夜天の主の元に集いし雲。」

「ヴォルケンリッター。なんなりと御命令を…。」

そう閉めくり、主であるはやての返事を跪きながら待つ四人…『ヴォルケンリッター』。だが、いつまでたっても無反応であるはやてを怪訝に思い、赤髪を三つ編みにした少女が顔を上げる。

すると、はやては気絶とまでは行かなかったが、呆然としていた。日ごろ、みらいやファイア達と過ごしたせいで耐性はついていたが、流石にこんな予想外な場所とタイミングでこんな状況になったことには驚きを隠せなかったようである。

「…おい、あんた大丈夫か？」

「え？…ああ、うん。大丈夫や…。」

「ヴィータ、主の御前だぞ。無礼な真似は許さん。」

三つ編みの少女…『ヴィータ』に咎めるような口調で話しかけるポニテールの女性…『シグナム』。

「別に気にせんでもええよ？私もこの状況がよく判らんし…。詳しい話、聞かせてくれへん？」

「主の望みとあらば。」

物事が割と穏やかに進み、ホッとするはやて。何度か命を狙われたことのある彼女にとって、彼女らに敵意が無い時点で充分なのだ。

「では、改めましてこの『闇の書』なのですが…。」

――ガチャッ

「おい、はやて。また勝手に魔方陣弄くつたの…か…。」

流れる気まずい沈黙。片付けを終わらせた直後、何故かはやての部屋から魔法の反応を感じ、様子を見に来たみらいが寢室の扉を開けたのである。

「……………」

何を言えいいのか判らず、6人は沈黙を保つ。だが、その空気をシグナムが叩き壊した。

「『シャマル』、『ザフィーラ』主を守れ！！ヴィータ、やるぞ！！」

――物事を物騒でややこしい方向へと……。こうして、海鳴市二度目の騒動は幕を開けたのである。

第三話 起動（後書き）

近日、アリシアを含めた数人のプロフィールを書きます

プロフィールと補足（リリア追加）（前書き）

改めてオリキャラ二人の紹介と補足を…。

プロフィールと補足（リリア追加）

名前 八神みらい（本名ミランダ・ラインベルト）

年齢 26歳（年明けと共に27歳になる予定）

武器 銃剣オルギニス（ベルカ式）

出身 アルテミア王国

備考・管理局も知らない世界から突如地球に現れた次元漂流者。偶然はやてを助け、そのまま居候していたら、いつのまにか家族と認め合うほどの仲になっていた。ジュエルシード事件を経てフィアやなのは達と交流を持ち、現在でも家族ぐるみで度々遊んでいる。ちなみに、元近衛隊の猛者ゆえ、実力は折り紙つき。大量の魔力光を引き連れて戦う姿から『銀河の守護霊』と呼ばれていた。

今回の『闇の書』による騒動は、彼の所持品と祖国の“とある物語”が関わってくる。

名前 ファーア・レイガード

年齢 20歳（来年の春頃に21歳になる）

武器 魔剣ヴィルガロム（現在、少々おかしいことに…）

出身 ベルファーア連邦

備考 みらいと同じく管理局が知らない世界から来た次元漂流者。アルテミア王国とベルファーア連邦は同盟世界なため、二人は互いの噂程度なら知っていた。今では戦友といった間柄になっている。ジュエルシード事件解決後、ほぼ成り行きで妖怪化したアリシアと行動を共にする。祖国では特務准将の座に就いており、自身の能力とどんな状況でも生き残ることから『黒鋼の不死鳥』の異名を持つ。もつとも、一度死んだことがある本人にとっては皮肉にしか聴こえていない。

彼らが度々使う『思念通信』や『非殺傷機能』などは、『思念通話』や『非殺傷設定』などと微妙に仕組みが違ふ。が、大体は一緒である。

名前 リリア（正式名称 先行試作型携帯式サポートAI・No1 2・リリアンヌ）

年齢 造られてから13年経過、ついでに人格は女性。

備考 兵士をサポートするべく造られた試作AIの一機でフィアの相棒。見た目は腕時計となんら変わらない。魔道科学の結晶であり、高性能な通信システムや索敵システムを搭載、さらに魔法も科学も理解できる上に使用もできる。試作型とはいえAMFを強制解除したこともある。本来なら数年の試験運用の後に回収される予定だったが、フィアとリリアが渋ったために未だ現役を続行中。

フィアと共に戦場を歩み続け、進化と成長を続けている。現時点では並みの魔導師より驚異的である。

名前 アリシア・テストロツサ

年齢 幽霊時に意識不明状態の期間があったので不明（精神年齢は15歳前後）

出身 ミッドチルダ

備考 死後リニスと魂が融合し、様々な力が集った『時の庭園』を経て妖怪『猫又』化したプレシアの娘。魔力は無いに等しいが妖力を所持しており、使い魔と違って完全に独立した存在。とりあえずプレシアとフェイトを救い、自分の亡骸を家族の元へと連れ帰った

ファイアに恩を返すべく現れたが、いつのまにか二度目の生を謳歌することに夢中である。また、家族を含めた周囲の人間には、まだ自分の事を教えていない。

ある日、こっそりファイアの魔剣に触れたら、自身の妖力に反応してヴィルガロムがおかしな事になった。今は特に問題無いのでファイアは怒ってない。

プロフィールと補足（リリア追加）（後書き）

ツッコミどころ満載ですな…。

第四話 守護騎士と守護霊（前書き）

あ…プロフィールに2人の通り名とリリアのこと書き忘れた……。

第四話 守護騎士と守護霊

みらい side

＼八神家・am0:03＼

「待て待て待て待て待て待て！！落ち着け落ち着けえ！！」

「問答無用！！」

今、はやての部屋はいつになく混沌としていた…。突如現れた守護騎士『ヴォルケンリッター』に敵と認識され、いきなりそのリーダー格に斬りかかれたみらい。彼は必死の形相で彼女の愛刀『レヴァンティン』を白刃取りで抑えていた。

（『はやてを守れ』と言ったな…。つまり敵では無い筈。そもそも…。）

…敵ならば…はやてに害なす者ならば、この家に設置した迎撃魔法が発動するはずなのだが…。

「…私の斬撃を初見で見切るとはな。貴様、できるな……。」

こっちは頭の整理を含めて必死だというのに、目の前の女性は心底楽しそうである。

「TPOを弁えていれば俺も似たようなことを思ったかもしれん。だが、敵と認めてない者に向ける闘志は持つとらん……！」

「それは私が相手にする価値もないということか……！」

「…おい、シグナム……。」

言葉の意味を勘違いし、激昂する目の前の彼女…『シグナム』。だが、そんなシグナムに『ヴィータ』と呼ばれた少女が気まずそうに声をかける。

「後にしろヴィータ……！騎士の誇りに賭けて私はこの男を……。」

「そいつ……主の家族だって……。」

・・・ピシッ

そんな音がシグナムから聴こえた。冷や汗をダラダラと流しながら、『ギギギ』ときこちなく首を後ろに回すシグナム。すると目に入ったのは、顔を真っ青にした守護騎士達と、笑顔を保ちつつ額に青筋を浮かべた主…はやてが居た……。

はやて side

くリビングにてく

「申し訳ありませんでした…。」

「いや、気にしないでいい。」

八神家の住人2人と守護騎士の4人は、色々と詳しい説明をするためにリビングへと移動した。リビングに来た途端、シグナムがみらいに土下座をしていた。

「甘いで、みらいさん。こいついつ時はもっとビシッとせな…。」

「ならば、お前にももうちょい厳しく…。」

「前言撤回や。」

「…あれ以上厳しくされんのは嫌や…。え？充分甘やかされてるやと？細かいことは気にしたらあかんよ？」

「…何を考えている？」

「何でもあらへん。さ、説明してもらおうで？」

「承知しました。」

その言葉を機に、シグナムが『闇の書』の説明を始めた。曰く、この全部で666ページもある『闇の書』というのは、他者の魔力の源…『リンカーコア』を全ページ分集めると持ち主に絶大な力を授けるというものらしい。彼女ら『ヴォルケンリッター』はその持ち主を守る護衛役なのだそうだ。

そして、彼女達が『ベルカ』に縁がある者達であることと、『時空管理局』とはなるべく会いたくないということも聞いた…。

「成る程な。これって実はとんでもない本やったんか…。」

「…うつすらと魔力がにじみ出てたのは気のせいでは無かったのか…。」

「では、早速蒐集のほうを…。」

説明を終わらせて早々にシグナムが蒐集の開始を提言する。しかし…。

「却下や。」

「「「「…は？」」」」

これには守護騎士の4人も啞然とした。眼前の主は、強大な力を手に入れる機会を目の前に『却下』と言ったのだ…。そのことが信じられない様子の4人だったが、みらいは違った。

「やっぱ、そうなるか…。」

「当たり前や。んな人様に迷惑かけてまで力なんか欲しくないわ。そういうわけで蒐集は禁止。これは主としての命令や。」

はやては『闇の書』を完成させる気が全く無いようである。そうすると困るのは守護騎士達のほうである。最初に赤髪の少女…ヴィータが口を開いた。

「じゃあ、あたしらはどうしたらいいんだ…？」

自分たちの役目のひとつ、蒐集が禁止されたので何をすればいいのかわからず、戸惑ってしまう4人。そこで、はやてが提案する。

「私たちの家族にならへんか？」

「「「「え？」「」「」」」

まさかの提案に再び啞然とする守護騎士達。今日は思考がフリーズしてばかりである…プログラムの方にバグが発生しないか不安になってきた…。

「確かに蒐集は禁止したけど、私が主なことに変わりは無いんやろ？ だったら、みんなの面倒をみるのは主である私の責任。ただ、どうせなら家来とかじゃなくて家族として面倒みたいんや…。」

「い、いいのか…？」

「ちょ、ヴィータちゃん…！」

まだ若干躊躇う4人。そんな彼女らをみらいが後押しする。

「お言葉に甘えておけ。俺も、お前らと似たようなもんだった…。」

……ただの居候から、いつの間にか本当に大切な家族になっていた。

経験者にもそう言われて決心がついたらしく、守護騎士たちはついにはやての提案に首を縦に振った。それに対し、はやてはすごく嬉しそうである。

「よし、決まりや…！私は『八神はやて』。改めて、よろしく頼むで〜。」

主のそれに応じるために、守護騎士達も改めて名乗りだす。

「闇の書の守護騎士ヴォルケンリッター、剣の騎士、烈火の将、『シグナム』でございます。」

「同じく、湖の騎士、風の癒し手、『シャマル』です。お世話になります。」

「鉄槌の騎士、『ヴィータ』だ…。」

「盾の守護獣、『ザフィーラ』。お気遣い、感謝する。」

各自、物々しくも礼儀正しく（1名、微妙）自己紹介をすませたヴォルケンリッター。さらに将であるシグナムが全員を代表して締めくくる。

「我らヴォルケンリッター一同、ご厄介になります。」

「いえいえ、ようこそ八神家へ。…って、みらいさん？何、自分だけ難しい顔しながら黙っとるねん…。」

「…ん？ああ、すまん。ちょっと考え事を…。」

今まで沈黙を保っていたみらいが慌てて名乗る。

「俺は『八神みらい』。いわゆる次元漂流者で元居候だ……おい、はやて。何故にそんな目線を送ってくる？」

何故かはやてがジト目でみらいを見つめてきたのだ。困惑するみらいにはやては口を開く。

「分かってないなみらいさん……。みんなが折角かつこいい名乗りを上げたのに、自分だけそんなんでいいと思つとるんか？」

「…つまり、俺に本名の方を名乗れと？」

「そうや。」

その言葉にため息を吐くみらい。しかし、シグナムを筆頭に全員名乗ってもらった手前、自分だけそうしないわけもいかず、諦めた。

「それでは改めて…アルテミア王国、元王家直属近衛銃士隊一等武官、『ミランダ・ラインベルト』だ。この際だ、好きに呼んでくれ…。」

「因みに『銀河の守護霊』なんて通り名がついてたらしいで。」

「それは言わない約束だろがあああああ!!」

いきなり黒歴史を暴露され、荒ぶるみらい。『20代で物語の英雄扱い』という、むしろ光栄に感じる理由なのだが、どういう訳か本人はひどく嫌がっている。

「ええやん。『盾の守護獣』がありなら『銀河の守護霊』くらい普通や。な? ザフィーラ。」

「我ですか? ……自分としては立派な二つ名だと思いますが…。」

「…もう、いいよどうでも……。」

……そんなに重たい話ではなく、むしろ笑い話の部類に入るのでいつか話してやるかと決めたみらいであった。

シグナム side

はやてとみらい、二人のやり取りを見ながらも、シグナムはある事

を訊きたくてしょうがなかった。ところが、先にその事に触れたのはみらいだった。

「そつえば、訊きたいことがある。」

「なんでございましょう…?」

「…これ。」

みらいは“ある物”を取り出す。それを見た瞬間、守護騎士の表情が驚愕に染まる。

「…やはり見間違いではありませんでしたか…。」

「「!?!?」」

「『闇の書』がもう一冊!? あんた、これどうしたんだ!?!」

ウィータ達を驚かせたのは、みらいの所持品である『謎の家宝』である。こちらは未だに鎖で縛られたままだが、やはり『闇の書』と瓜二つである。先ほどのゴタゴタの最中、視界にチラリと入ったので気になっていたのだ。

「うーん…その反応からして、やっぱりコレの正体は謎なのか……
あと、もうひとつ驚くかもしれないことがあるんだが…」

そう言つて手を掲げるみらい。すると、彼の手に三角型の魔方陣が出現した。

「…もう、なんとはいいいのかわかりません……。」

ただでさえ信じられないこと続きだというのに…自分達ベルカと全く縁の無い筈の世界出身の彼が何故…。

…ベルカ式の魔方陣を展開している？

咄然を通り越して、最早狼狽の域に達してきた守護騎士たち。彼女らのその様子に、みらいも流石にこれ以上話しを続ける気が無くなった。なにより、はやてがいい加減眠くなってきたようで、ウトウトし始めている…。

「なんか話が長くなりそうだから続きは明日…いや、もう日にち変わってるのか……。朝にしよう。部屋はどうするか……。」

「丁度いい空き部屋があるから、布団出してシグナムとシャマルはそこにしよ。ザフィーラはみらいさんと一緒にええか…。」

「あの、あたしは…？」

一人余ったヴィータが尋ねる。それに対し、はやてはニッコリしながら答えた。

「私と一緒に♪」

「あ、そう…。」

ヴィータは微妙な表情を見せたものの、翌朝に満足気な表情を見せながら起床してくることは、本人さえ知らない。

――この日、八神家に新しい家族が増えた。その光景を、“みらいの本”が心なしか嬉しそうに眺めていた…。

第四話 守護騎士と守護霊（後書き）

ヴォルケンズの称号、特にシグナムのってアレであってましたっけ？

第五話 平和で騒々しい日常（前書き）

今後、ちよいと展開が原作と季節がずれるかもしれません…。

第五話 平和で騒々しい日常

はやて side

「12月28日・八神家」

「みらい殿、また手合わせ願えないだろうか？」

「ん？いや、今日はちょっと。」

朝食を終え、新聞を読んでいたみらいに模擬戦を申し込むバトルマニア（シグナム）。それに対し、同じく戦闘好きである筈のみらいは珍しく渋る。そこへ、ヴィータとはやてが口を出す。

「ちょっと待て、シグナム。今日、みらいはあたし達と遊ぶんだ。」

「そうやで。だいたい、昨日二人が暴れたせいで庭がとんでもないことになったばかりやないか…。」

先日、二人の戦闘狂により八神家の庭は悲惨なことになる…。無論、原因である二人は責任を持って庭を修復した後、残りの家族全

員に説教を受けた。

「ぐっ…。」

「そういうわけだ。それに、今日は先に二人と遊ぶ約束をしてたんだ。悪いがまた今度な？」

「…わかりました。ですが、年内にもう一度くら「今日の夕飯はシグナムだけシャルマルの料理や。」…すいません、自重します…。」

「ちょっと！？それどう言う意味よ!？」

自身の料理を罰ゲームのように扱われ、食器を洗いながら憤慨するシャルマル。しかし、そのことに関しては誰も味方してくれなかった…。

「言葉のままだ。あのザフィーラを見てもまだ言っか…。」

そう言っってベランダの方を指差す。するとそこには、蒼い毛並みの狼が丸くなって蹲っていた。実は昨日の夜からずっとこの調子なのである…原因は…言わずもがな…。

「違うもん！！私、料理下手じゃないもん！！昨日はたまたま失敗しただけだもん！！」

「失敗しても“マズイだけ”にしろ！！」

昨日ザフィーラが倒れたとき、シャルは『ただ眠くなっただけよ』
と言ってたが、みらいは目撃した。彼女がこっそりザフィーラに“治療”魔法を使用したのを……“治療”ではなく“治療”だったことが余計に不安だった……。

「まったく……。頼むから、もう一人で料理すんのはやめてくれよ？」

「……はい。」

……『闇の書』の起動から三日、守護騎士たちは八神家での生活に早くも慣れてきたようである。彼女らを迎え入れた二人も、新たな日常を満喫している。特にはやては、みんなの服を買いに行った時にとてもイキイキとしていた。

「そんで遊ぶ約束はしたけど、何をするんだ？いつもみたいに釣りは無理だろ？」

「そつやな、ヴィータがなあ……。」

先日、みらいの『どこでもフィッシング魔方陣』で釣りを教えてみたのだが…ヴィータは開始3分で飽きてしまったのだ。彼女の性格上、ああいうのは無理らしい。

「あれの何がおもしろいんだよ…」

「大人の遊びつてもんが分かってないな…。そんなだから見た目も…」

「ああ！？（怒）」

「すまん、言い過ぎた…」

そんなわけで頭を悩ます3人。あんまり派手に体を動かすようなことは、車椅子のはやてがキツイので却下。室内系は、元気が有り余ってるヴィータが嫌がる…

「…あ！隠れんぼでもするか？」

「え？家でするん？」

「狭いんじゃないか…？」

八神家は比較的に広い方に分類されるが、隠れんぼをするには流石に狭い。そんな二人の心配を余所に、みらいは不適な笑みを浮かべる。

「ふふふ…、抜かりは無いぞ？ちよつと待ってろ。」

そう言つて早速魔方阵を展開するみらい。ベルカ式と独特の技術が混ざったアルテミアの特有魔法である。シグナムとシャマルがその光景を二日前の会話を思い出しながら眺めていた。

「…やはり、細かい部分は違えどベルカ式だな。」

「そうよねえ…。でも、アルテミアなんて世界…私たちの時代にあったかしら…？」

『闇の書』が起動した翌朝、みらいはシグナム達に自分の世界のことを語った。特に、互いにその存在すら知らないにも関わらず、何故か同じ魔法技術を有していることには驚いた。名前が『ベルカ式』で彼女達の出身が『ベルカ王国』なら、やはりアルテミアになんらかの形で技術が流れたということで一応片が付いた。

「…だが、実用性や出鱈目加減は向こうの方が上かもしれん……。」

「…体をそのまま縮めるってどんな魔法よ……？」

二人の視線の先には、みらいの発動した魔法陣により人形サイズまで縮んだはやてとヴィータ、そしてみらいが居た。

「うおおおお！？なんだこりゃあああ！？」

「わああ…、家具がめっちゃでかく見えるわ……。」

「ぬはははは。本当はコレ、潜入や隠密行動専用の魔法なんだけだな…。まあ、要は使いようだ。これで思う存分遊べるぞ……ん？お前も参加するのか…？」

よく見ると、3人に加えて“みらいの本”…最近はとりあえず『黒の書』と呼んでいる例の本が一緒に縮んでいた。こっちは“自力で”縮んだようである。

「なんか最近積極的やな…。もしかして、前から構って欲しかったんか？」

「…あたしはあんまりコイツ好きじゃないんだけど……。」

「どう考えたって、あの時はヴィータが悪いだろ？」

あの時とは、アルテミアとベルカの話が終わらせたとのことである。ひとりでに移動することからただの本では無いことは確かなのだ。しかし、一応できる範囲で調べたのだが、結局『闇の書』とそっくりな理由も中身がなんなのかも解らなかった。鎖が取れないので中身を調べれないのだ。それに痺れを切らしたのがヴィータだったのだが…。

『ああもうメンドクせえ！！どいてろ！！』

『馬鹿！！よせ！！』

『「ラケーテン・ハン」ズビシッ！！「ブベツ」？』

…鎖を叩き壊すべく『グラフ・アイゼン』を振り上げたヴィータの顔面に、『黒の書』がメリ込んだ…。

みらい曰く、自分も同じようなことを何度かしたらしいのだが、ヴィータと同じように反撃されるか瞬間移動で逃げられたのだそうだ

…。そのため、鎖を外すこと自体はとうの昔に諦めていた。

「ていうか、知ってたら止めろよ!」

「『よせ!』って言ったろうが…。」

「まあまあ、とにかく始めよ? 『黒の書』さんも混ぜてええよ。」

はやての言葉に喜ぶかのごとく『黒の書』は宙を舞った。その様子に若干ヴィータがおもしろくなさそうな表情を見せる。しかし…。

「んな顔して…。本当は自分が悪かったって分かってるくせに…。」

それを直接言うと思うので黙々とくみらいであつた…。そして同時に、今後のことを真剣に考え始める。何を考えてるかという、自分たちの友人達のことである。

- - - 先日、管理局員であることが発覚した猫姉妹。

- - - 前回の事件を経て交流関係が続いている提督と執務官ら。

- - - 管理局の民間協力者である戦友達。

そう…彼の周囲には、守護騎士たちが接触を避けたいと言った管理局員だらけなのだ……。そのことを言った時の4人の様子は、容易には語れないほどに落ち込んでいた。それに対し、みらいは『大丈夫だ』と言ったのだが…当然、簡単な話では無い。

（なのはやフィーアは話せば解るとして…問題はアースラか……。）

特にクロノだ…。あの真面目な性格上、説得には苦勞しそうである。リンディは…考えるのはよそう…絶望しそうだ……。

…ハラウン親子と『闇の書』の因縁を知らないみらいは、それ以上のことを考えなかった…。

「みらいさん？どうしたん？」

「おっと、悪い悪い考えごとした…。」

せめて、今ぐらいそのことは忘れよう…。そう思いながら、みらいははやて達と遊び始めるのだった。

…この時、彼はまるで予想していなかった…。“あの二人”が自分達に隠し事をしていることを…そして、それが辛くなってきた

いたことを……。

第五話 平和で騒々しい日常（後書き）

次回は大晦日の話になります。

第六話 大晦日 年越し準備編（前書き）

作者は転生物が嫌いなわけではありません。むしろ、お気に入り登録してあるのがチラホラと…。

第六話 大晦日 年越し準備編

みらい side

〽海鳴市・12月31日・15:37〽

本日は大晦日。一年の終わりとあつて、どここの家庭でも多少なり忙しそつである。ある者は終わらなかった大掃除を、ある者は宴会の準備を、そして…

「【紫電一閃】!!」

「【三日月閃光波】!!」

……ドゴオオオオオオオオン!!

今年最後の模擬戦を楽しむ…のはこの二人ぐらいであろつ……。レヴァンティンとオルギニスをぶつけ合いながら、二人の戦闘狂は次第に笑みを深くしていく。

「流石です、みらい殿!!」

「そつちもな！！シグナム！！」

二人は、はやてに頼まれた今晚の買い出しの帰り道である。思ったより早く済んだので、空き地で模擬戦と言う名の道草に興じていた。当然、抜け目なく封鎖結界は展開済みである。

「それにしても…、別に敬語使わなくていいって、言ってるだ…ろ！！」

…ガキンツ！！

「私がそつしたいだけです！！お気になさらず！！」

振り下ろされた銃剣をレヴァンティンで防ぎながら返答するシグナム。この数日で、みらいとはやてに敬語を使っているのはシグナムとザフィーラくらいだった。しかもザフィーラの場合、ただでさえ口数が少ないので微妙に判別がつかない…。

「なんかムズムズするんだよ！！」

「慣れてください！！」

その後も2度3度と切り結び、戦いは激しさを増していく。ところが、その二人の間に水を差すような音が響く。

・・・ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。！

「つと、時間が…。」

「そのようですね…。仕方ありませんか…。」

ほつとくと一生終わらないことは自覚してたので、アラームをセットしといたのだ。これ以上続けると時間が遅くなり、道草食ってたことがばれる…。

「ザフィーラの二の舞は嫌だからな…?」

「承知しております…。」

・・・八神一家暗黙のルールその1。悪い子には『シャマル飯』。
「『みらいのデコピン』。」

「…みらい殿のデコピンも相当なモノでしたが……？」

「当たり前だ。今、はやての辞書に『自重』があるのはデコピンの御蔭だ。」

最近の犠牲者はヴィータである。勝手に『黒の書』の鎖を壊すことにチャレンジし、それに対して『黒の書』が激しく抵抗したせいで家が滅茶苦茶になってしまったのだ…。そして主の権限により、お仕置き内容が『みらいのデコピン』になったのである。

「その後、ヴィータはずっと呻きながら床を転がってましたよ…。」

「ヴィータも流石にこれで懲りたる。さて、さっさと帰らないと俺らが同じくらい酷い目に遭うからな…急ぐぞ？」

「はい。」

そうして二人は買い物袋を手に、帰路に着いた。しかし、悲しいかな…戦闘の余波で傷んだ食材があったため、二人が寄り道して模擬戦をしていたことが発覚してしまい、二人ともシャマルの作ったお菓子を食べる羽目になった。その結果…。

「シグナムてめえ！！俺が先だああああああ！！」

「譲れません！！こればかりはああああ！！」

「二人とも…あんまりうるさいと、夕飯無しやで…？」

「…夕飯時までトイレの獲り合いが続いたそうだ…」

フイア side

〈次元航行艦アースラ・艦長室〉

「本当にお疲れ様。」

「どうも。疲れの元凶さん…。」

アースラの艦長室で、二人の人物が向かい合っていた。1人はこのアースラの艦長『リンディ・ハラウン』提督。もう一人は『フイア・レイガード』臨時教導官である。今年の仕事が一段落し、ね

ぎらいの言葉と報酬を受け取りに来たのである。

「あら酷いわ。諸悪の根源みたいな言い方なんかして…。」

「実際そうでしょう？あなたの無茶なスケジュールのせいで、今年最後の一月月武装隊とクロノの顔しか見た記憶がないんですから…。」

「

げんなりしながら言うフィアだったが、その言葉を聴いたらクロノ達は本気で怒るかもしれない…その鬱憤を晴らすための被害者は主に彼らだったのだから…。」

「ま…給料も入ったし、それなりに楽しかったからそれ程悪くはなかったですけどね…。」

「それはよかったわ。…因みに、この後は何か予定でもあるのかしら？」

「いや。家に帰っても俺しかいませんし、だからと言って各自の家族団欒を邪魔したくありませんから、もう一日御厄介になります。」

それを聴いてニツコリするリンディ提督。いつもの嫌な予感をする笑顔とは微妙に違い、逆に不審に思ったが、その心配は無駄だった。

「アースラクルーで年越しパーティやるんだけど、来ない？」

「本当ですか？それは是非とも参加させてください。」

元々そういう宴会や祭り事は好きなので、内心すごく喜んでいて。さて、何を持っていいのかな…と、考えていたらある事を思い出した。

「…開始時間はいつです？」

「午後6時だから…まだまだ時間には余裕があるわね。何か用事でも？」

「はい。それまでには終わりそうなので先に済ませときますね。それでは後ほど…」

「ええ、待ってるわ。」

そう言ってフィーアは艦長室を出て、そのまま真っ直ぐと向かっていった。自室では無く、先日の訓練時に赴いた『瓦礫の世界』へと…。

??? side

とある管理外世界

「クソッ…一体、何がどうなっているんだ……。」

「落ち着けよ、それを確かめるために呼んだんだろ？」

前回、フィーアとクロノ達が訓練で使用した瓦礫だらけの世界に二人の人影があった。二人ともフィーアが鍛えた武装隊の一員である。

「だがな、俺の記憶上あんな“奴ら”いなかった筈だぞ？あいつらのせいで展開も大分変わっちゃったし……。」

愚痴をこぼし続ける金髪でオッドアイの少年。それに対し、相方らしき黒髪に赤い瞳の少年が答える。

「けど、どっちかつーと良い方向に変わったじゃないか。プレシアとフェイトも和解してたし……。」

「そ・れ・を、俺がやりたかったんだよ!!」

「…いい加減、前世のことは忘れないか？」

「馬鹿言え!! 九死に一生よりレアな状況だぞ!? 簡単に諦められるか!!」

金髪の少年の言葉に、黒髪の少年は深い溜息をついた。別に友人と言えるほどの仲では無いが、自分の周囲に居る“同類”は彼しかないのだ。当初、“知識が無い”自分は世界を壊すかもしれない恐怖に襲われて下手に動けなかった。そこで、背に腹は変えられないので彼と行動を共にしていたのだが…。

「俺は神に選ばれた存在だ!! ハーレムを作る権利くらいある筈だ!!」

（…絶対に頼る相手を間違えた…。）

第一、こいつの言う通りならすでに自分が恐れてた『世界の破壊』が起きたのだ。その影響は自分が思ったより全然しょぼく、むしろ悪くなかった。同時に、『展開』を半ば神聖視してた自分がアホらしく感じた。

（この世界が前世のアニメ世界だからって、ちょっと自惚れたのか
もしれない…。）

――自分はもう、この世界の一人の人間であることを忘れていた
のかもしれない…。

そんなことを考えていたら金髪の少年が声を荒げ始めた。

「遅ええんだよ！！いつまで待たせんだ！！」

「…提督への用事の方が一局員の呼び出しより重要に決まってるだ
ろ？」

気づいたら相方が呼び出した人物…『フィア・レイガード』がい
た。心なしか彼は少々不機嫌そうである。当然と言えば当然だが…。

「で、なんの用だ？『閃夜光』二尉。『レスター・D・シャーマ
ン』三尉。」

黒髪の少年…『レスター』は若干俯いたものの、金髪の少年…『光
一』は叫ぶ。

「とぼけんな！！てめえも『転生者』なんだろ！？」

なんの駆け引きも無く、いきなり核心を問いかけた光一。それに対しレスターは啞然とするが、フィーアはというと…。

「違う。」

即答した。だが、レスターは不審に思った。転生者では無いと言うのなら、何故“転生者と言う言葉に疑問を持たない”？光一も同じらしく、立て続けに怒鳴り散らす。

「嘘つくな！！知らないなら“転生者”って言葉に疑問を持つ筈だ！！」

「俺はお前の言う『転生者』じゃあ無い。が、『転生者』がなんなのかは知っている。」

「何…？」

「この世界は…、君達の言うところのアニメの世界なんだろう？そして、君達は前世の記憶があり、さらに神を名乗る者から力を与えられた……だろ？」

「ッ！？」

二人の反応を見て、自分の予想が当たっていることを確信したフィアは言葉を続ける。気のせいだろうか…フィアの雰囲気が変わって来た気がする…。

「やはりそうか…。この半年で、『転生者』を名乗る人間が何人も僕のことを殺しにきたよ…。やれ『原作を守る』だの、やれ『俺の嫁に手を出すな』だの、やれ『原作をぶっ壊す』だの……何様のつもりだい？」

「ひいつ！？」

言葉と共に殺気をぶつけられ、光一が悲鳴をこぼす。だが、フィアの言葉は終わらない。

「君達の前世ではどうだったか知らないさ…だけど、この世界の住人は間違いなく存在し、生きているんだ。みんなそれぞれの物語を歩んでいるんだ…。にも関わらず、君たち転生者はみんなを“会話できる登場人物”ぐらいにしか考えていない！！みんなの人生を“

物語の展開”ぐらいにしか考えていない!!”

訓練の時とは比べ物にならない規模の怒気と殺気を溢れさせながら
フィーアは激昂する。その気配に当てられ、二人は全身が震え始め
た。だが、震えながらも光一は抗う。

「ふ、ふざけんな!! 勝手なことばかり抜かしやがって!! 黙らせ
てやる!!”

「よせ!! 確かに俺たちはこの世界の住人を”ひとりの人間として
”見て無かった!! 間違ってたのは俺たちだ!!”

「すっ込んでろ腰抜け!! 俺は神に選ばれた人間だ!! モブキャラ
”ごときに!!”

――フィーアにソレは禁句だった…。それは今の彼にとって一番
の禁句…。

「…閃夜……。僕は言った筈だ… “この世界の住人はそれぞれの物
語を歩んでいると”……。」

「黙れモブ!! “原作の主要メンバーが居れば後はどうでもいいん
だよ”!!”

-
-
- その瞬間、レスターの視界から閃夜光一が“消えた”。

第六話 大晦日 年越し準備編（後書き）

大晦日は三つに分割します

第七話 大晦日 荒ぶる不死鳥編（前書き）

これで大丈夫かな…？反射対策……。とりあえず、光一が能力を原作キャラ程使いこなせてないのを前提でお願いします。

第七話 大晦日 荒ぶる不死鳥編

レスター side

(う、嘘だろ…!?)

転生者：レスターは大変驚愕していた。さっきまでフィアに向かって口上を述べていた光一が視界から消え、彼がいた筈の場所にはフィアが立っていた。光一の腹部があつたであろう部分に蹴りを決めた体制のまま…。

しかし、それ以上に驚くべきことがあつた。

(なんで『反射』が発動しなかった…!?)

- - - 光一が神を名乗る者から受け取った『ベクトル操作能力』が発動しなかったのだ。

光一は神を名乗る者に出会った時『SSS級の魔力』と、レアスキルとして『ベクトル操作能力』を所望したのである。その要求は通り、彼は“自分が考える限りで”無敵の存在になった…筈だった。ちなみにレスターは、自分の好きだったアニメの機体をデバースに

してもらっている。

（『木原真拳』でも使ったのか？）

無敵と謳われたその能力を、原作で破った数少ない方法を思い浮かべる。しかし、その割には威力がおかしいような…。

「…ねえ。」

「はいいい!？」

いきなり声をかけられ、思わず両手を挙げて上擦った声を出してしまった。今更だが、フィーアの雰囲気が目頃のモノと違いすぎてメチャクチャ怖い…。

「君も僕と戦いたい？」

「滅相ありません!!!」

そもそも光一が勝手にやってることであって、レスター自身はフィーアと戦う気などなかった。それ以前に勝てる気がしない…。

「そう…、だったら早く“訓練通り”にした方がいいよ?」

「え?」

「【羽ばたけ・黒羽】。」

そう言ってフィーアは翼を生やし、さっさと飛んでいつてしまった。
一人残されたレスターは、フィーアの意味を考える。そして
…。

「ッ…! やつべ、そういうことか! ? 『ガデラーザ』 セットアップ
! !」

《AiAisir》

慌てて自身のデバイスを展開し、その場を飛び去るレスター。

…それとほぼ同時に、レスターの居た場所が光の奔流に飲み込まれた。

・・・ヒュンッ！・・・どごおおっ！！

「うごっおおおおお…！？てめえ…なんで生きてやがる…！？
てか、なんでさっきから『反射』が発動しねえ…！？」

「企業秘密だ。」

風を切る音と鈍い打撃音が響く。空中から一気に加速し、思いつき
り光一を踏みつけた。実はさっきから『反射』は“発動している”
のである。さっきからフィーアはある程度手加減した蹴りを放ち、
その威力に比例した出力の『反射』による力を感じた瞬間、全力の
蹴りを放ちながら“『反射』の力をぶち抜いている”のである。

ただ…この方法はやたら神経を使い、『反射』に逆らって蹴り抜く
ので足が痛い上になりに威力が減るのである。しかも、相手が『反
射』の出力を最大にしたらこの手は使えなくなる。

「クソツタレ！！どきやがれ！！」

「おっと。」

ベクトル操作により力を増幅させ、勢いよく起き上がりながらフィ
ーアを退ける光一。フィーアは特に焦ることもなく立ち退き、その
まま彼は瓦礫の山に走り込んだ。

「逃げる気か！？ふざけんな腰抜け！！【ジェノサイド・インパクト】！！！」

彼のデバイス『エクスカリバー』により放たれた魔砲が周辺を薙ぎ払う。だが、何発放とうともフィーアにはかすりもしない。その時、急にフィーアが動きを止めて光一に話しかけてきた。

「なあ、閃夜光一二尉…。君は、この世界を何だと思っている…？」

「ああ…？そんなの決まっているだろ！！アニメ『魔法少女リリカルなのは』の世界だ！！」

「…その物語には出ないが、確かに存在している人々は君にとって何だ？」

「ハンツ！！モブキャラなんてただの“目障りな背景”だ。いつそ皆殺しにしてや……。」

光一はそれ以上言葉を続けることができなかった。何故なら…。

「…それを聞いて安心したよ……これで躊躇せずに…。」

- - - コロセルネ !!

『ベクトル操作能力』の『反射』は常に何でもかんでも反射してるわけでは無い。この世の全てを反射するということは、『重力』も『光』も『音』も『酸素』すら拒絶するということだ。某学園都市の最強は音を遮断したこともあるが、自分に話しかけてきた人物が何を言っているのか判らず、結局話を聞くために音の反射を切った。

つまり、日常生活に支障が出るものは“基本的に反射してない”ということである。戦闘のプロならば状況に合わせて最適な反射を選択しただろう。だが、光一は素人同然のクズ。

- - - カッ!!

「ギャあああああああああああああああああああああああ
ああああッ！！！」

故に、唐突に目の前で『スタングレネード』を炸裂させられれば、目を焼き切られるのは当然。ファイアの『黒羽』製、手加減無しに閃光弾は一瞬にして光一から“光を奪った”。

「目がっ！！目がああああああああ！！？」

--
バアアアアアアアアアアアアン！！

「――！！？」

ネタとかテンプレ抜きで苦しむ光一に容赦無く追い討ちを仕掛ける
フィーア。今度は“音を奪うべく”、“炸裂音を増強”させたグレ
ネードを造りだし、炸裂させた。鼓膜を破り、さらに激しい苦しみ
を伴う光一はもはや立っていることもできず、地面をのた打ち回っ
ていた。

真つ暗で無音の世界に叩き落され、激痛に苦しむ光一はさらに自分に迫る脅威に気づくことはできなかった。いつのまにか彼の周囲

を怪しげな煙が取り囲んでいたのだ。フィアはいつのまにかガスマスクを造りだして装着している。やがて…。

「じぼッ…!？」

“酸素結合型の毒ガス”により吐血し始めた光一。様々な激痛に襲われながらも、本能的に彼は『ベクトル操作能力』により体内の毒素を排出しようとした。だが酸素と結合しているために、いつも以上に操作が難しく、毒素の排出に“ベクトル操作を集中”せねばならなくなった。

この瞬間、『光』と『音』と『体の自由』を奪われた光一は、『反射』さえ奪われた。

- - - 『体の自由』を奪われた故に、逃げれない。

- - - 『音』を奪われた故に、彼の足音が聴こえない。

- - - 『光』を奪われた故に、彼が右手に握る黒い物が見えない。

- - - 『反射』を奪われた故に、その銃弾を跳ね返すことは叶わない。

「さよなら、閃夜光――等空尉。」

――フィアの言葉と銃声が瓦礫の世界に響いた。

フイア s i d e

「こんなもんか…。」

彼の足元には半端無い激痛の果てに、脳天に『ヴィルガロム・魔法銃形態』による“呪い弾”を撃ち込まれて沈黙した光一が転がっていた。死ぬ一步手前だが生きている。短期間とはいえ腐っても教え子の一人、しかも宴会の直前に殺人沙汰を起こすつもりは無かった。もつとも、“呪い弾”を撃ち込む直前までは殺す気満々だったが…。

《これからどうなさるんで?》

「呪い弾で『ベクトル操作能力』は使えなくしといた。あとはアイスラに連れて帰る。こんだけ酷い目にあっただ…流石に、この世界が物語なんかじゃない本物の現実って自覚したろ。」

《彼からしたら背景にボツコボコにされたってことですからね。そんな主人公願ひ下げです。》

「もつとも、これで懲りないようなら…。」

…今度は即効で殺す。

「さてと…シャーマン三尉!!降りて来い!!」

「はい!!」

不意に上を見上げながら声を出すファイア。すると上空には、一部始終を見ていたもう一人の転生者『レスター・D・シャーマン』が居た。悪魔のような戦闘を行った男に唐突に声をかけられ、恐怖しながらも素直に従う。

体をガクガクと震わせながら降りてきたレスターを睨みながらフィアは問う。

「俺が閃夜二尉を蹴り飛ばす直前に、貴官が言ったことに嘘偽りは無いか？」

「え？……あ…。」

「……確かに俺たちはこの世界の住人を一人の人間として見てなかった。間違ってたのは俺たちだ！！」

それは正真正銘自分の本音であるため、体の震えを抑えながら真っ直ぐな視線で答える。

「はい。それは俺の本音です…。」

転生者として、知りもしない原作の展開を気にして全ての行動を躊躇い続け、最終的に光一みたいな馬鹿にくつつくしかなかった…。今思えば、自分もその馬鹿の同類だったかもしれないが…。

「…ふむ、自覚してるだけコノ馬鹿（光一）よりマシか……。いい

だろう、害も無さそうだしほっといてやる。」

「へ？」

「なんだ？コイツと同じ目に遭いたいのか？」

「いやいやいやいやいやいやいやいやいやいや……
そんなこと無いですけど、最初の口振りから考えて転生者が憎いよ
うでしたから……。」

レスターはフィアの最初の言動から考えて、何人かの転生者と遭
遇した拳句に転生者にあまりいい感情を持っているようには感じな
かったのである。

「……実際、この半年で俺を襲ってきた何人かは憎くてしょうがない
さ……。封鎖結界も張らずに襲い掛かってきた拳句、一般人を何人
も巻き込みやがった……。その上こう言った奴がいた……。」

……こいつらが死んだって原作に影響は無い。

その言葉に啞然とするレスター。転生者としてではなく一人の人間

として、その言葉を吐いた転生者が信じられなかった。改めてこの世界の一人住人であることを認識した今は尚更である。

「流石にそいつを含めた何人かは殺した…。この馬鹿も同じ臭いをするが…まだやって無いようだから今回は見逃してやる。“一般人に向かつて攻撃したら死ぬ呪い”もかけといたと、そいつが目覚ましたら伝えておけ。」

「…了解。ですが……。」

「ん？」

自分の同類たちの行いに意気消沈するレスター。それでも、彼はフイーアに訊かざるを得なかった。

「あなたは一体何者なんですか？」

現在自分が存在するこの世界が広いことと、原作なんてものが通用しないことを理解している。それにしただって、『転生者』が平均して異質な存在であることに変わりはない。

…そんな存在をあっさり仕留めた彼は何者なのだ？

そう思うのは当然である。そんなレスターの疑問にフィーアは自嘲気味な笑みを浮かべながら答えた。

「ただの“死に損ない”さ…、詳しいことは後で色々教えてやる。ほら、さっさとアースラに帰るぞ。年越しパーティが始まっちゃう…。」

「は、はい。」

…沈黙中の光一を抱えながら、二人はアースラへと帰っていった。

くオマケく

「しかし、“アリス（アリシア）を預けたエイミィは”無事だろうか…？」

光一の呼び出しにきな臭いもの感じたので、念のためアリシアはエ

イミイに預けといたのである。

《普通、“エイミイさんに預けたアリスさんを”心配しません?》

「本気で言ってるのか?」

(アリス? ああ、あの猫か…。)

二人の会話を聞いていたレスターは思い出す。最近、何度も執務官補佐が金色の猫に抱きついては引つ掻かれるところを…。

(うん、危ないのは補佐官の方だ…。)

諦めることなくアリスに抱きついては切り傷を増やす補佐官の姿を想像するのは簡単だった。

…案の定、アースラに帰って来て出迎えてくれた彼女は絆創膏だらけだったそうなの…。

第七話 大晦日 荒ぶる不死鳥編（後書き）

レスターの方は今後ちよいちよい出します。

第八話 大晦日 年越し編（前書き）

みらいとリーゼ姉妹の出会いはその内書こうかな…。

第八話 大晦日 年越し編

レスター side

（アースラ艦内・食堂・12月31日・pm20:56）

「ようネーちゃん一緒に飲ま（バキイ！！）…。」

「アリス（猫）に絡むな酔っ払い…。」

「フィーアさん！！艦長がクロノにも飲まそうとしてます！！」

「全力で止める野郎共！！」

「……了解！！」

現在、アースラの食堂は混沌としていた…。年越しパーティが開始されてしばらく経ち、いわゆる二次会状態になったのだが…武装隊と艦長含む一部の大人組が暴走し始めていた…。

「大丈夫ですか執務官！？」

「すまない、助かった…。」

「リンディ提督は一体何本飲んだ…？」

「…。（空き瓶の山を指差す）」

「ひい、ふう、みい、よ…七本!？」

乗組員に未成年も少なからず存在するアースラ。しかし、どうせなら年が変わるまでは起きていたいで、結局この戦場染みた宴会場にいるしかないのだ…。それ故、未成年と良識ある大人達が全力で鎮圧を続けていた。

その様子を遠くから、レスターは炭酸飲料をチビチビ飲みながら見ていた。自分は仲間達とちやっかり安全地帯に居たりする。

「改めてみると…、フィーア教官ってすっかりアースラで馴染んでるよな。」

そう言ったのは、武装隊で比較的仲のいい『ドートレス・リーオー三尉』。それに同調するように、『ジム・ヘリオン空士』が頷く。

「俺も最初は認知外世界出身って言うから、どんなヘツポコかと思つてたよ…。今思えば、すごい失礼な考えだよな…。これ……。」

いつだかの訓練で質量兵器の恐ろしさと、しばらく共に過ごすうちにフィアの人格を知った彼は、管理外世界に対する偏見を無くしていた。

「ところでレスター、あの馬鹿の様子は？」

「ん？ああ、あいつか…。今は視力も聴力も回復してるよ。ただ、レアスキルと心が…。」

フィアに喧嘩を吹っつけた挙句、逆上して非殺傷設定を切りながらレスターごと攻撃した光一は、今は魔道科学による治療を受け、医務室で呻きながら眠っている。本来なら懲罰物…下手したら殺人未遂だが、フィアが訴えなかったことと、光一の惨状を見たリンディ提督たちが『もう充分罰を受けた』と判断したので不問となった。

…そもそも、ぶっちゃけ光一は女性局員と武装隊全員に嫌われていたので誰も嘆かなかった。

「まあ、奴にはいい薬になったろうさ…。」

「だいたい…なんでいつもレスターはあのアホと一緒に居るんだよ？」

「こっちにも色々事情があったんだよ…。でも、もうその必要はなくなったださ…。」

フィアと自分の素性を話し合うのは光一のこともあり、また今度ということになった。だが、確かに今のこの状況でその手の話をしたくないのは確かだ。それに…。

「…もう原作のことは忘れて、自分らしく、こいつらと一緒に馬鹿やりながら過ごそう…。」

そう決意を改めたレスターは、もう転生した自身のことを気にするのを辞めていた。そこへ、3人にフィアの声が掛けられる。

「シャーマン！！リーオー！！ヘリオーン！！手伝ええええええええええ！！エイミイがああああああああ！！！！」

「げ！？」

「執務官補佐って確か……。」

「隠れ酒乱じゃ……。」

年越しまであと三時間……彼らの夜は長い……。

みらい side

く八神家・21:45く

ところ変わって八神家。みらいはベランダで人型になったザフィーラと酒を飲み交わしていた。女性陣はリビングで『ガ。つか』を見ながら爆笑している。いや……シグナムだけ必死に耐えていたな……。

「……普通に楽しみやいいのに……。」

「我々の中では一層プライドが高いので仕方ありません……。」

「……お前も敬語なのな……。」

「とても20代の貫禄に見えませんが故に。」

微妙にニヤリとしながら言いやがったザフィーラに若干腹をたてながらも、御猪口で酒を煽るみらい。正直に言うところ最近リーゼ姉妹とフィーアが来ないので、いわゆる飲み友がいなくて寂しかった。なので、今酒を共に飲む相手が居て結構嬉しかったりする。

「それにしても…、来年からマジでどうしよう……。」「

「…申し訳ありません。」

「いや、お前らのせいじゃないさ。気にするな。」

困っているのは、みらいの周囲に居る管理局関係者のことである。年末故に、家族で過ごすのを優先しているため、高町家とテストロツサ家には今のところ会ってない。リーゼ姉妹やアースラメンバー、そしてフィーアは忙しくて直接は会ってない。

だが、それも年明けに色々ひと段落したら話は別である。

「とりあえず、なのはとフィーア…あと、フェイトには言っても平気だな…。考えるのは、あいつらを呼んでからにするか。」

「リーゼ姉妹と言う方々は？」

「あの二人は呼ばなくても来るけど、呼んでも来ない。まあ、ジュエルシードほつたらかしにしてたぐらだから平気だろ。何より、悪い奴じゃないから大丈夫だ。」

「信頼してるようですね。」

「...それに対し、みらいはニツコリしながら答える。

「ああ、はやてやお前らと同じくらい大切な奴らさ...。」

外が本格的に寒くなってきたので、二人はその会話を最後に家の中へと戻っていった。丁度、我慢できずに爆笑しているシグナムという珍しいものが見れたのでラッキーだった。

リーゼアリア side

やや遠く離れた場所から、八神家を監視する二人の人影があつた。先程みらいの会話にも出ていたリーゼ姉妹である。二人は寒い夜空の下、ずっと刑事の張込み染みたことを続けていた。

「…ねえ、アリア……。」

「……言わないでよロッテ…私だって今ので心が挫けそうよ……。」

監視しながら盗み聞きもしているリーゼ姉妹。その最中、みらいがザフィーラに言った言葉が二人に突き刺さった。

「……（リーゼ姉妹は）はやてやお前ら（家族）と同じくらい大切な奴らさ。」

自分達を、彼が大切にしている家族と同じくらい大切な存在と言ってくれたのはとても嬉しかった…。しかし、同時に悲しくもあつた…何故なら……。

「……自分達は彼から、その大切な家族を奪おうとしているのだから……。」

そもそも、『闇の書』の主である八神はやての元に襲撃者と次元漂流者が現れたのがことの始まりだった。襲撃者が現れた当初、二人は慌てて阻止しようとしたのだが次元漂流者^{みらい}が代わりに撃退してしまい、彼はそのまま居候の身に落ち着いてしまったのである。

無論、計画の障害になることを恐れて謎の襲撃者を撃退しながらみらいを排除しようとしたのだが…。逆に返り討ちに遭ってしまった。その後、弱っていたところを襲撃者組に襲われてしまい死にかけたそこを、何の因果か知らないがみらいに助けられてしまい、それを機に交流が始まってしまったのだ。

「気づいたら私だってミランのこともはやてのことも好きよ…。でも、しょうがないじゃない…!!」

「アリア…。」

最初は、自然と接触しやすくなって好都合と思っていた…。しかし、自分達が封印せねばならない『闇の書』の主、はやてやみらいと共に過ごすうちに迷いが生じ始めた。そして、いつしかみらいとはやてを計画遂行のための対象ではなく、彼と同じく大切な存在として見ていたのだ…。

「それでも…お父様の目的のためなら、私は……。」

- - -心を鬼にする!!

本人は気づいて無いかもしれないが、リーゼアリアは泣きそうな顔でそう言った。それに対して、リーゼロッテはもう何かを言うのを諦めた。

- - -様々な信念と思惑が交差する大晦日。その日、ある者は自分らしさを、ある者は家族を守ると改めて誓った。彼らは…彼女らはその硬い決意を胸に、新たな年を迎えるのであった。

??? side

＼謎の空間＼

「ほう…中々、おもしろい世界に飛ばされたようじゃないか……。」

そこは真っ白で何もない謎の空間。否、人が3人居た。一人はただ平凡な見た目の少年、一人はシンプルな格好でありながら神々しさを感じる老人、そして最後の一人は、船乗りが被るような三角帽子に青いコートを身に着け、金髪で青い目をした青年であつた。

平凡な少年は目の前の光景に啞然としていた。ついさっき自分は事故で死に、気づいたらこの空間に居て、神を名乗る者から転生の話を持ちかけられたのだが…。

……金髪の青年が突如現れ、神を瞬殺したのである。

今、神を名乗った老人は青年に踏みつけられていた。そのまま青年はおもむろに空間にヒビを入れ、何かを映し出した。そこには、謎の一团とドンチャン騒ぎ状態の“赤みのかかった茶髪の青年”が映っていた。

「我が孫ながら元気そうでなによりだ。すぐに連れ帰るのはやめとくかな…。」

「…き、きさ…貴様、神であるこのワシに手を出してただで済むと…。」

どうやら老人はまだ死んでなかったようである。だが、青年は特に気にした様子は無い。

「別にお前が死んだって世界は壊れないだろ？神は世界の仕組みを“創っただけ”で“管理なんか微塵もしてない”んだから。」

「ッ！？貴様はいつたい！？」

「…“ベルファイア”で通じるか？」

その瞬間、老人の顔がみるみる内に青くなった。やがて、かすれるような声で言葉を絞り出した。

「…さ…さっ…“殺神鬼”…だ…と…？」

「そういうこと…。ではでは偉大なる異世界の創造神様？あなたの力の源である“信仰”は、俺が司る“神に対する怨念”に勝てるかな？」

…その瞬間、真っ白だった空間が真っ黒に染まった。

「あらら残念、惨敗のようで…。」

同時に、黒くなった世界に一層黒い何かが蠢いた…。

「よ…よせ………!!」

「サヨナラ…【喰らえ・黒雲】。」

「うわあああああああッ——————!!」

瞬間、老人は黒い何かに飲み込まれた…。少年はその光景を啞然としながら眺めているしかなかった…。神を名乗る謎の老人をあつさり消し去ったこの男はいつたい…。

…急にその男が少年に話しかけてきた。

「おっと、ほつたらかしにして悪かった。まだ間に合うはずだから、魂を肉体に帰してやる。」

「え…あの、いったい何が起きてるんです………?」

「とりあえず、お前は暇潰しのために殺されて別世界に飛ばされる
ところだった。俺は、ちよつと孫を探しに来ただけさ……。」

何故か少年は神を殺したこの男から恐怖を感じることは無かった……。
むしろ、安心感を感じる。思わず問いかけてしまった。

「あなたは本物の神様なんですか……？」

……すると、男は自嘲気味な笑みで答えた。

「いや……ただの親馬鹿で爺馬鹿さ……。」

……3千年以上続いた戦乱の時代に、終止符を打ったベルフィー
ア連邦の創始者は答えた。

第八話 大晦日 年越し編（後書き）

フィーアの爺さんは正真正銘チートを予定してますので、当分本編に絡めません。代わりに転生者がこれ以上送り込まれなくなりました。

プロフィール2（前書き）

転生者二人とじーちゃん。あと神について

プロフィール2

名前 レスター・D・シャーマン（D＝デカルト）読みは『ディー』
でいいです。

年齢 18歳

出身 転生後はミッドチルダの一般家庭

階級 三等空尉

武器 『ガデラーザ』（ガンダム00参照）縮小した本機を右腕に
装着。GNフアング使用可能

備考 転生者その一。前世ではメカ好きの高校生だったが、神の暇潰しのために（本人は知らず）殺されてリリカルの世界に半ば強制的に転生させられた。能力の希望を訊かれた時、レスターが望したのは自身が最も好きなMA『ガデラーザ』をデバイスにすることだった。意外とすんなり要求は通った模様。しかし、いまのときGNフアング使用数は十個前後が限界であり、現在も数を増やすために特訓中。

原作知識を待つてなかったので、展開を壊すことが怖くて転生後の自分の在り方に迷いを持っていた。しかし、フィアと光一のゴタゴタを経て原作とか関係なしに自分らしく生きることを決めた。

名前 閃夜光一

年齢 18歳

出身 謎（光一曰く、その方が主人公らしいとのこと…）

階級 二等空尉

武器 『エクスカリバー』 特に能力なし。

備考 転生者その二。前世でもイケメンだったが、転生の際に調子に乗って金髪オッドアイにしまった。自己中な性格は元々で、それが原因で彼女はできなかった…。それを自覚することなく転生、神に願いを叶えてもらったことをいいことに、自身を『神に選ばれた存在』を自称。神に貰った『SSS級魔力』と『ベクトル操作能力』を駆使して好き勝手やってきたので、関わった人間のほとんどが彼を嫌っている。アースラに乗り込んだ時は自重していたが、原作介入が目的だっただけである。

フィーアの逆鱗に触れ、生死の境を彷徨った上に能力を奪われた現在ではただの移動砲台である。しかも、SSS級の魔力をうまく収束できず、“AA級の魔法しか撃てない”ことが発覚。その内に戦力外通告をくらう予定…。

名前 ヴィリアント・リーガ・ベルフィア

年齢 63歳なのだが精神年齢は…（見た目は20代）

出身 ベルフィア連邦

備考 フィアのじーさん。見た目は金髪にしたフィアそのもの。魔法主義と科学主義による戦乱の時代をものの10年弱で終止符を打った大英雄。今ではかつての部下や弟子に連邦を任せて隠居していたのだが、孫であるフィアが行方不明になり、娘であるベルノアにお願い（脅）されて文字通り無限の彼方からやって来た。義理の息子や部下にさえチート呼ばわりされるその力は半端なく、異世界の神をいとも容易く殺す。もつとも、その力に触れる事件に巻き込まれている間にフィアとリーマス、そしてエミリアの悲劇が起きてしまったのだが…。

フィアを発見したものの、思ったより楽しそうにやってるので、もう少しほっとくことにした。ついでに、自分もこの世界をちょっと満喫する気のおうである…。

名前 創造神

年齢 不明

備考 死者に転生を持ちかける怪しげな老人。しかし、正真正銘ち

やんとした神様。暇を潰すために世界を創造し、ずっとその世界を眺めていた。が、結局それにも飽きて適当に死人を別の世界に送ってみることにした。そうやってしばらくふざけていたのだが、『殺神鬼』であるヴィリアントに殺害される。

彼ら神々の力の源は人々の『信仰心』である。なので、人間に感謝されたり祈られたりすると神は力が増えるのである。よって、少しでも力を手に入れるために転生者には能力を受け取らせ、感謝させようとしていた。結局ヴィリアントの力の源である『神に対する怨念』には微塵も及ばなかったが…。

プロフィール2（後書き）

レスターの友人たちはMSの名前をネタにしていますが、転生者ではありません。

あと、どうでもいいですけど『ベル（ノア）フィア』なんです…。

第九話 明けましてOHANASHIだ（前書き）

さて、本格的に狂ってきた…

第九話 明けましてOHANASHIだ

みらい side

〽八神家・0:00〽

「「「「「あけまして、おめでとございます。」「「「「「

除夜の鐘が鳴り響く中、はやてとみらいに倣い、守護騎士の4人も見よう見まねで同じように新年恒例の挨拶を交わす。

日にちが変わり、同時に年が変わった。波乱に満ちた一年が終わり、また新しい日々が始まるのである。もっとも、今年も静かに過ごせなさそうだが…。

「さて、寝るか。」

「そつやね、私もそろそろ限界や…。」

「え？もう寝るのかよ？」

元気が有り余ってしょうがないヴィータがごねる。しかし、朝になったら色々やることがあるので眠っておきたい…。

「朝になったら初詣に行くんだから、今のうち寝とけ。」

「でもよう…。」

「ヴィータ…、あまり主達を困らせるな…。」

「……わかったよ、寝るよ…。」

シグナムにまで言われてしょんぼりするヴィータ。若干哀愁漂う彼女をはやてが寝室に連れて行った。二人が寝室に向かっていった二人をみらいは苦笑いで見送った。そして、慌てて止める。

「おいコラ、ヴィータ。お前だけ歯磨きしてないだろ？」

「ええゝめんどくせえよゝゝ。」

「……三連デコピンスマッシュ…。」

「歯ブラシはどこだあー!!」

「……『今年もこんな調子かよ……』と思いつつ、彼の表情は楽しそうである。」

レスター side

「アースラ・宴会場（食堂）・0:00」

「「「3!」」」

「「「2!」」」

「「「1!」」」

「「「「0!」ハッピー・ニューイヤー!」」」

時計が0時を回り、新年を迎えることができた。さつきまで充分騒がしかったアースラの食堂はさらなる熱気に包まれた。酔い潰れたり潰された人も今では全員起きて一緒に騒ぎ直していた。

しかし、その騒ぎから抜け出して医務室に向かった者たちが居た。一人は転生者であるレスター、もう一人は次元漂流者であるフィアだ。

「…しつかしまあ、大分離れたつてのにここまで馬鹿騒ぎの音が聴こえるとは……。」

「こういう仕事で出世すると、自然とああいう風に騒ぐ暇無いんだよ。だから余計に羽目を外したくなるってもんなのさ……。」

二人は医務室で伸びてる光一を含めて、互いに知ってることを話し合うことにしていた。お祭りモードに拍車がかかり、食堂に人が集まった今なら話をしやすいと思ったのである。

そして、ついに医務室に着いたのだが…。

「…何で執務官が居るんですか？」

どういわけか先にクロノが医務室に居た。今から大っぴらに話せないような話し合いを言うのには何故いらっしゃる？

レスターが困惑する中、フィアはいたって冷静だった。そんな彼に、レスターと同じように困惑しながらクロノが話しかける。

「…フィア、なんでシャーマン三尉まで連れて来た？」

「こいつも閃夜と同じなんだよ…。」

それを聞いた途端、クロノの目が驚きで見開かれる。そして彼の口からよどみなく出た言葉は、今度はレスターを驚愕させた。

「な！？彼も『転生者』なのか！？」

「ッ！？」

「…なんでクロノが『転生者』という言葉を知っている！？」

互いに警戒の色を出す、フィアがそれを霧散させた。

「落ちてけクロノ…。“ミッドで何回も襲撃された”のは分かって

るがコイツは大丈夫だ。」

「…君がそう言うなら信じよう。確かに、彼は今までの奴らとは違うみたいだ……。」

今の会話から察するに、クロノも転生者に難癖つけられて襲われた身のようなのである。しかも、フィーアと同じく何度も…。

「つまり、クロノ執務官も関係者ということですか？」

「そうだ。さっきフィーアに念話で呼ばれたんだ。さて、色々説明してもらっぞ？」

…ズドムッ!!

いきなり鈍い音が響いたと思ったら、フィーアが眠っている光一に溝打ちを決めていた。その容赦無い光景に、どんな状況になってもフィーアを敵に回さないようにしようと誓う二人であった…。

「ッ!? うえっほ!! げほッ!!」

「起きろボンクラ。」

・・・こうして半ば強引に話し合いは始まった。

〈会議進行中〉

「なるほど、神様が…って、信じると思ってるのか！？真面目に話せ！..」

「そう言われなくても…。」

想像以上にぶっ飛んだ話の内容にクロノがキレタ…。そりゃ、真面目な話をしにきたのに『神様』だの『輪廻転生』だの言われた挙句に、自分達の世界を『アニメの世界』と言われれば怒る…。

「フイーア！！君からも言ってくれ！！…フイーア？」

・・・クロノが話をフイーアに振ったのだが、彼は想像以上に難しい顔をしていた。

「…どうしたんだ？」

「いや、あとで話す…。ところで閃夜。」

「はひい！？」

すっかりフィアのことをトラウマになったようで、光一から上ずった返事が返ってきた…。

「『この世界』は『お前の知ってる世界』とどのくらい違う？」

「…居るはずの人間は全員居るけど、居ないはずの人間が何人か居たっすよ……。」

――二人の次元漂流者。

――謎の暗躍組織。

――死ぬはずだったプレシア。

――転生者たち。

「それだけじゃ無い…まるで物語が進まなくなったように静かすぎる……。」

「どついうことだ？」

彼の言葉が引っかかり、クロノが尋ねる。すると、光一はクロノを見ながら口を開いた。

「実は今年中にもう一つ、大きな事件が起きる筈だったのさ…。アニメ通りなら、あんたと因縁深い『闇の書』による事件がな…。」

「なんだと…。どついうことだそれは!？」

「落ち着け、後にしろクロノ。」

自分の父親が死んだ原因である、『闇の書』という言葉にいきり立つクロノをフィーアが制した。そして光一に続きを促す。

「俺の記憶が正しければ今年の…いや、もう去年か。12月前後には、局員や高町なのはが守護騎士に襲われて事件が始まる筈だったんだ…けどこの通り、みんな無事に正月を迎えちゃった。」

（（…その格好で言われてもなあ……。）（））

その事件に関係無くさらに自業自得とは言え、明らかに満身創痍の状態で言われると微妙な気分になる。どうにか空気を払拭し、クロノが改めて問いだす。

「…それで、『闇の書』の主は判っているのか？」

ロストロギア『闇の書』は主無しでは何もできない…否、主になるべき人間の元にしか現れない。そして、書のページを埋めきるまで主の体を蝕んでいき、最終的に主を殺す。もともと、書を完成させても暴走して世界を滅ぼすのだが…。

そんな危険なモノを放置できないし、場合によっては主に選ばれた人間を助けなければならない……。のだが…。

「ジュエルシード事件の民間協力者、『八神みらい』の身内である『八神はやて』だ。ついでに彼女が車椅子生活を余儀なくしてる原因は『闇の書』の侵食なんだよ…。」

「…何？」

みらい経由で親しくなった妹分の名前が出て怪訝な表情を見せるフイア。しかし、彼が不審に思った理由は別にある。

「なあ、クロノ…。」

「どうした？」

「その本は持ち主を侵食し続けるんだよね？ということとは、はやての奴は体を悪くする一方の筈だよな？」

「…この後『閃夜光』は、自分が存在するこの世界がアニメでもなく、原作の展開なんて運命染みた物が無い現実の世界であるとようやく認識する。」

「そのはずだが…何かおかしいことでも…？」

「…『闇の書』が狂ったのか、はやてがすごいのか知らんが……あいつ…。」

-
-
-
立ち上がるくらいなら出来るようになったぞ？

第十話 守護騎士と魔王（前書き）

連続投稿。でも中々進まない！！

第十話 守護騎士と魔王

ファイア side

くアースラ・転送ポート前・1月1日・a m 7 : 3 0 く

「それでは、しばしお別れさせていただきます。」

「向こうに帰っても元気だね。教導の方、またその内お願いするわね？」

「その点に関しては保留ということぞ…。」

現在、ファイアはアースラの面々に見送られながら地球に帰ろうとしていた。武装隊にいたっては全員敬礼までしてくれている…かなり嬉しかった…。

「おっとそう言えば、クロノ、レスター…！」

「ん？」

「なんですか？」

「…無茶するなよ？」

転生者の言葉を借りるなら『原作が滅茶苦茶になった』今、光一の知識は役に立たないかもしれないものの、この事件に『ギル・グレアム』提督が関わっているととなると放置できないので、ミッドチルダや本局ではクロノとレスターが、地球ではフィーアが捜査することになった。

捜査の根拠が『一般局員（転生者）の前世の記憶』なんて言えないのでリンディにすら教えてない。なので基本的に3人はいつも通りの仕事と生活をしながら、こっそり調べることになったが…。

「心配には及ばない。そつちこそ、気をつけてくれよ？」

「分かってる。……おい、アリス…いい加減に抜け出して来い。」

『みゃあ。』

「ああ！？アリスちゃん！！」

フィアと一緒にアースラから去ってしまう事を惜しんで、エイミイがアリスを抱きしめていたのだが、彼の呼びかけに答えたアリスはあっさりとエイミイの腕から逃れて、フィアの肩に乗った。

「それでは皆さん、御機嫌よう。」

・・・その言葉を最後に、フィアはアースラを去っていった。

なのはside

（海鳴市・とある神社・am8:45）

「はやてちゃん、明けましておめでとう!!」

「明けましておめでとうな、なのはちゃん!!」

初詣に来た高町家と八神家。丁度神社の入り口あたりでバツタリ出くわし、新年の挨拶をしていた。みらい達大人組は挨拶もそこそこに世間話を始めている。因みに、ザフィーラは狼形態である。

「ところで、はやてちゃん…その人たちは？」

「私たちの新しい家族や。…少し理由が複雑やから、後で詳しく教えるわ。」

「…もしかして魔法関係なの？」

「うん…。」

不意に守護騎士達の方に視線をやるのは。すると、赤髪を三編みにした少女と目が合った。その後、どういつわけかジーツと見つめてきた…ていうか睨んでる？

「えっと…そんなに、睨まないで？」

「睨んでねーです。こーいう目つきなんです。」

「ヴィータ、嘘はあかん。なんや悪い子はこーやで。」

そう言っではやてがポケットから取り出したモノを見て、ヴィータは顔を真っ青にした。

「ちよつ、はやて!?!なんでシャルのオセチ（生ゴミ）の余りな
んか持つてるんだよ!?!」

「ふつふつ…、決まってるやないか…これを何なのか教えずに
なのはちゃんに食べさせ……。」

「はやてちゃん……少し、頭冷やそうか…?」

――アッ――
――!?!?――

「私、なのは。高町なのはって言うんだ。」

「ヴィータだ、よろしくな。みらいから話は聞いてるぞ。」

目にも止まらぬ速さで折檻を喰らったはやてを余所に、二人は改めて自己紹介をした。丁度、大人組も話を終えたようである。

「おい、そろそろ行くぞ…」って、今度は何したんだはやて……。」

「これ…。」

そう言っただけのシャルのオセチ（毒物）の残りをヴィータが見せる。それとなのはを見て、大体のことを察してみらい。

「…全く、正月早々シャルの料理（産業廃棄物）なんか持ち歩きやがって……。」

「ねえ、ちょっと！？さっきから変な称号付いてない！？ていうか段々酷くなってる！？」

悲しみに暮れるが、この一週間でシャルの料理の腕は上達するどころか落ちる所まで落ちた。故に、料理に関してシャルを弁護してくれる者は居ない…。

「ヴィータちゃん、シャルさんの料理（殺人兵器）ってどのくらい酷いの？」

「…聞きたいか？」

「……やっぱりいいの…。」

ヴィータがあまりに虚ろな表情を見せたために訊くのが怖くなったのはであつた…。

みらい side

何をしたのかは不明だが、一瞬でなのはがKOしたはやてを車椅子で連れてくみらい。そのうち神社の本堂に辿り着いた。

「みらい殿、これはどうすればよいので？」

初詣どころか神社すら知らない守護騎士たちを代表してシグナムが尋ねる。時間が掛かりそうなので高町家の面々には先に済ませてもらった。

「とりあえず、ほら。」

チャリンっと、彼女らの手に小銭を渡す。

「この小銭をあゝの賽銭箱に入れて、今年全体を通しての目標や願いが叶うようにお祈りするんだよ。」

「成るほど、では早速行ってまいります。」

言つや否や早速お賽銭箱に直進する3人と一匹。そこでいい加減ダウン中のはやてを起こすことにしたみらい。

「おゝい、起きろ。」

「ハッ!!ここはどこ?私は美少女?」

「はいはい、アホやってないでさっさと済ませろ。ほれ、小銭。」

「ぶう。ノリが悪いでみらいさん…。よっこいしょっと。」

…。そう言つてはやては、弱々しくも車椅子から立ち上がった。

みらいがやって来てからというもの、掛かり付け医である石田先生でさえ理由はわからなかったが、はやての足が徐々に回復してきたのである。本当に微々たる回復量だったが、3年近く経った今は立ち上がるだけなら出来るようになったのだ。もっとも、移動の方は当分車椅子のお世話になりそうであるが…。

「今年は何を祈るんだ？」

「そうやね…家族も増えだし、友達も出来だし、足の病気は治りそうやし…どうしょ？」

「…気づけば自分の求めたモノのほとんどが手に入っていた。

「だったら、『今年もこの幸せが続きますように』ってのはどうだ？」

「うん、それがええね。」

ちょうど守護騎士メンバーが終わらせたらしく、二人は並んで御賽銭箱に小銭を入れて両手を合わせた。その様子を見た参拝客達は、全員微笑ましい光景を見るような視線を送ったという…。

「……みらいさん……。」

「ん？」

「これからよろしくー！」

「……こちらこそよろしく頼む。」

……二人の後ろ姿は、仲の良い本物の親子に見えたそうだ。

第十一話 懐かしの…（前書き）

やっと出せたよ、この3人…。

あ、今更ですけど…フィアとみらいは描写が無い限り、戦闘中も常に私服です。

第十一話 懐かしの…

ファイア side

〳海鳴市・前回のマンション・1月1日〵

「…やっと帰ってこれた……。」

『たまりにたまった埃がすごそう…』

「それは無い。夜叉鴉に留守番頼んどいたから。」

例によつてアリシア（猫形態）を肩に乗っけながらファイアは今、海鳴市にあるかつての拠点のマンションに帰ってきた。ジュエルシード事件の時は、日中ほとんどフェイト達と過ごしていたので自身の部屋はただの寢床になっていたが、事件が解決してフェイト達がミッドチルダに帰った今は、本格的にファイアの自宅になった。アリシアもファイアと行動を共にするようになってからは、アースラに出向くまではそこで一緒に暮らしていた。

『それでも、掃除はしましょうよ？気分的に。』

「まあ、それもいいか。おっと、ここだここだ…」

気づいたら自分の部屋の前に着いた。ところが、扉の前でフィアが動きを止める。

「……………」

『どうしたの…?』

「……………誰か居やがる……………」

『え!?!』

言うや否やフィアは右手に“黒い煙”を纏わせる。実はコレ、フィアの魔剣である『ヴィルガロム』なのである。手入れをしている最中にアリシアが勝手に触り、妖力に反応して異常をきたしてしまい、原型を留めなくなった上にプログラムと分離できなくなってしまったのだ。だが、煙状態なのは未使用の時のみで普通に使う分には支障が無かった。むしろ、煙状態の方が携帯に便利なので結果オーライである。

「留守番させた夜叉鴉が無反応となると…かなりの手錬か……………」

夜叉鴉は並みの戦士なら秒殺できるくらいの戦闘力がある。そんな鴉達がたむろしているこの部屋に居座れるとなると、相当の実力者に違いない…。フィーアは警戒心を一層強くする。

「部屋の中が吹き飛ぶかもしれないが…【ショット】。アリシア、お前は離れてろ。」

『分かった。』

フィーアはアリシアを肩から降ろし、ヴィルガロムを室内戦でもつとも恐ろしい威力を発揮すると言われる散弾銃に変化させ、ドアノブに手をかける。そして…。

…キイッ…。

ほとんど音を出さずにドアを開いて中に進入する。玄関には誰もいないことを確認し、すぐ近くの部屋に入った。その部屋の安全を確認し、全神経を集中させてマンションの部屋全体の気配を探る。そして、侵入者の気配を感じた…。

（リビングか…。）

気配を消し、侵入者が居るであろうリビング格に向かうフィア。そして、彼はその姿を捉えた。侵入者は三人…のんきにお茶を飲みながら仲良くテレビで正月番組を見ていた。

…その姿を見た瞬間、フィアは緊張の糸をぶった切った…。

侵入者が相当の実力者というフィアの予想は見事に的中していた。並みの戦士ではこの三人にはまるで歯が立たないのは間違いない…。金髪で赤目の少女はA A A級の魔力を持つてるし、年に不相応な実力がある。それに比例して、彼女の使い魔である犬耳と尻尾を生やしたオレンジの髪の女性も強い。そして、その二人の保護者である黒髪の女性はオーバース級の魔力を持った大魔導師である。

…だが、夜叉鴉が無反応だったのはそんな理由では無い。

「あ、フィア！！明けておめでとう！！」

「遅かったじゃないかい。」

「今更だけど、お邪魔してるわ。お久しぶりね。」

「……とりあえず、新年おめでとぅ… フェイト、アルフ、そんでプレシアさん…。」

「… ジュエルシード事件の中で共に過ごし、共に戦った仲間である『フェイト・テストロッサ』と『アルフ』。そして、『プレシア・テストロッサ』がそこに居た。」

フェイト side

「… あれ？ なんでいきなり or z のポーズになったのかな？ 疲れてるのかな？」

「どうしたの、フィーア？」

「変なもの食べて腹でも下したんじゃないかい？」

最近『転生者』のことで神経質になってたので、その分脱力感の反動が半端無いことをまるで察してくれないフェイトとアルフに若干涙目のフィーアである。だが、そんな理由で彼女たちに文句など言えないので忘れることにした。

「いや、なんでもない…。それより、なんで俺の部屋に？」

「え？リンディ提督から話聞いてないの？」

「んあ…？」

「私が説明するわ。」

そう言ったのはプレシア。彼女曰く、最近テストロッサ親子に纏わり着く不審者が増えたそうだ。当初は前回の暗躍組織の残党が復讐でもしにきたのではと思ったのだが違うようで、どちらかと言うとストーリーの類だったらしい。だが、気味の悪さと数の多さが半端無いのだった。

「…なにが不気味って、フェイトに纏わり着く奴等の数が一番多い上に、そのほとんどが無駄に大人染みた9歳児だったらしい…。」

（…『転生者』じゃね？）

「それで、リンディ提督に相談したのよ。そしたら、『管理外世界に行けばマシにならないかしら？』って言ったのよ。」

…まあ、確かに管理局員でも無い限り管理外世界にまで追ってくることは不可能だろう。しかし、何故に俺の部屋？なんて思ってたなら、それを察したようでフェイトが口を開く。

「あ、私たちの部屋はミッドに帰る時に解約しちゃったんだ…。それを言ったら、リンディ提督がフィーアの部屋ならまだ平気だって言うから…。」

「…因みに、その話はいつしたんだ？」

「えっとね、大晦日の1週間前くらいかな？新年はここで迎えちゃった。」

「……あの性悪め…。」

「…最近、何か企んでるような顔してると思ったらこうなること予想してたな…？ふふふ…いつか覚えてるよ？次回、教導の仕事頼んできたら絶対に引き受けてやる…訓練にあんたも参加する条件でな…！」

「フィーア、あんた顔が怖いことになってるよ…？」

「気にするなアルフ、今年の抱負が決まったただけだ…。おっと、そういえば…。」

アルフに軽く返事をし、おもむろに外へ出たファイア。そして…。

『ふぎゃあああああつ!!』

「あだだだだだ!! 暴れんな!! 諦めろ!!」

何かの悲鳴と共に、ファイアが何かを持ってきた。よく見るとそれは、金色の毛並みと二本の尻尾を持った猫だった。

「ほい、プレシアさん。」

『ツ!?! にゃあああああああ!!』

「え、私?…すごい嫌がつてるわよ…?」

「気にするな、ただのツンデレだ。」

『フツシャアアアアア!?!』

激しく抵抗するその猫を問答無用でプレシアに手渡すフィア。すると、プレシアの腕に収まった途端に急激におとなしくなった。

「……あら……？」

『……。（ビクビク）』

しばらくその猫、アリスを…自身の娘アリシアを腕に抱き抱えるプレシア。おもむろにアリシアの顔をジーツと見つめる。それに対して、まだ自分のことは黙っていたいアリシアは内心ドキドキしていたが、同時に懐かしい母のぬくもりに安らぎを感じていた…。

「何故かしら……。この子を抱いてると、とても懐かしい感じが…。」

「…って、母さん！？泣いてるよ!？」

「え…？」

フェイトに言われて気づくと、プレシアは自然と涙を流していた。ただ、流した涙に悲しみは一切感じられず、むしろ嬉しさや喜びさえ感じた…。アリシアも同様のようで、猫の状態にも関わらずプレ

シアと同じような表情を浮かべてるように見えた。

「…もうしばらく、抱いてていいですよ。」

「……そうね、お言葉に甘えさせてもらっわ…。」

プレシア本人が自覚してないとはいえ、かつての念願だった親子の再会を果たしたのだ…。もうちょい堪能させてもバチはあたるまい…。

「さてと…。フェイト達は今日、予定あるのか？」

「うっん、無いよ。とりあえずフィアと合流してからと思ってたんだ。」

「丁度いい。このあと八神家に行こうと思ってたところだ、一緒に行こうや。」

「うん!!」

《失礼、フィア殿。》

突如、フェイトのデバイスであるバルディッシュが話しかけてきた。

「おお、久しぶりバルディッシュ。」

《御無沙汰しております。ところで、リリア殿は？》

「そういえば…、いつもより静かだと思ったらリリアが居ないじゃないかい…。」

そうなのである。今日、フィーアはリリアを身に着けてない…ていうか連れてきてない。

「ちょっと訳ありでな…、アースラの武装隊の一人に預けてきた。」

転生者の一人である『レスター』のことである。彼にはクロノと共にミッドチルダの方で頑張って貰うことになっている。しかし、『闇の書』に関わる者たちの規模と『転生者』特有の異能の力は未知数であり、場合によっては二人には荷が重すぎる可能性があった。

なので、そんじょそこらの魔導師よりよっぽど強いリリアを二人に預けてきたのだ。元々、フィーアに同行せられてたのは、フィーアの補助やサポートでは無くて実戦^{データ}経験を記憶し、成長させるためであった。その経験とデータをフィーア以外の誰かのため生かすこと

こそ、リリア本来の役目なのである。

《残念です。また一緒に話がしたかったのですが…。》

「そういえば、バルディッシュっていつもリリアと通信繋いでたね…。」

「マジで…？あいつ何も言っていなかったけど…？」

「…言う必要ありました？」

ナチュラルにリリアの声が聴こえた気がしたファイアだったが、気を取り直して八神家に遊びに行く準備を始めた。フェイトとアルフも同様である。すると…。

「…プルルルルル！」

「ん？電話か…。どうせまた変な勧誘か詐欺だろう…。」

自分の身内は基本的にリリアを通した『思念通信』か、フェイト達

がよく使う『思念通話』で連絡を寄越して来る。なので、家の電話を利用して来る者は基本的に口クでもない奴ばかりだった。

「でも、フィーア…今、そのリリアが居ないんじゃないの？」

「あ、そうだった。」

アルフに言われて思い出すフィーア。よく考えると、みらいとは特に思念通信を多用しまくったので、下手すると彼かもしれない…。そう思い、受話器を取ると…。

『おいしいおいしい！！リリアを誰かに預けるなら先に教えてお
おとおお！！』

「うおおッ!? やっぱりか… とりあえず、新年おめでとう。」

「おう、明けましておめでとう……じゃ、ねえよ！！こちらら大切な相談事があるつてのに何してんだお前はあああああ！！？」

「……相談事？……」
「闇の書のことか……？」

『なんで、もう知ってるんだ…。まあいい、とにかく来てくれ…。』

「分かった。フェイト達も連れてって平気か？」

『お、3人共居るのか？丁度いいや、むしろ連れてきてくれ。』

「はいよ。そんじゃ今から行くわ。」

『おう。待ってる。』

そこで通話は終了した。受話器を置いたフィーアは考える。光一から聞けるだけ聞いた話によれば、『闇の書』の侵食によりはやてが命の危機に瀕してしまいうらしい。しかし、そうだったら今の電話でその事を真っ先にみらいが口にするはず…。

「まあ、行けば分かるか…。」

「どうしたの？」

「歩きながら話す。とにかく、早く行こう。」

――転生者の話により、ある程度の事情を知っていたフィアでさえ、八神家で待ってた“モノ”には驚かざるを得なかった……何故なら…。

「おう、待ってたぞ。」

「久しぶり！！フェイトちゃん、アルフさん、フィアさん……あ、プレシアさんもお久しぶりです！！」

「明けておめでとうや、フィア兄！！それで、初めましてフェイトちゃん！！」

――戦友達と、鎖が解かれた一冊の黒い本を持った車椅子の少女……。

「ふむ……。この者達が、みらい殿の言ってた…。」

「あら、フィーア君って結構かつこいいじゃない？」

「なんか、個性的な奴ばかりだな…。」

「我らが言えたことでは無いと思うぞ、ヴィータ…。」

「…彼らの新しい家族たち…そして…。」

「初めまして…で、いいのだろうか？我が主の友よ。」

「…鎖が解かれた、“もう一冊の黒い本”を手に持った銀髪の女性
性がそう言った。」

第十一話 懐かしの…（後書き）

…。因みに、まだ防衛プログラムは健在です。何が起きたのかは次回に…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8489y/>

漂流者は守護者で保護者～ヤテンノオヤコ～

2011年12月8日15時12分発行